



アメリカ スポーツ用品業界史

第1話 「ローリングス」 (Rawlings Sporting Goods CO.,Inc.)

第2話 「リデル」 (Riddell Sports inc.)

第3話 「ウイルソン」 (Wilson Sporting Goods Co.)

第4話 「シャット」 (Schutt Sports Manufacturing Co.)



アメフトのヘルメットの起源は・・・

第5話 アメフトのヘルメットの起源は・・・第一章

第6話 アメフトのヘルメットの起源は・・・第二章

第7話 アメフトのヘルメットの起源は・・・第三章



アメフトのヘルメット以外の装具の歴史

第8話 アメフトのヘルメット以外の装具の歴史・・・第一章

第9話 アメフトのヘルメット以外の装具の歴史・・・第二章

第10話 アメフトのヘルメット以外の装具の歴史・・・第三章



アメリカン フットボールの起源と歴史

第11話 アメリカンフットボールの起源と歴史・・・第一章

第12話 アメリカンフットボールの起源と歴史・・・第二章

第13話 アメリカンフットボールの起源と歴史・・・第三章

第14話 アメリカンフットボールの起源と歴史・・・第四章

第15話 アメリカンフットボールの起源と歴史・・・第五章

第16話 アメリカンフットボールの起源と歴史・・・第六章

第17話 アメリカンフットボールの起源と歴史・・・第七章

第18話 アメリカンフットボールの起源と歴史・・・第八章

第19話 アメリカンフットボールの起源と歴史・・・第九章

第20話 アメリカンフットボールの起源と歴史・・・第十章

第21話 アメリカンフットボールの起源と歴史・・・第十一章



アメリカンフットボールの歴史と大統領の関わり

第22話 アメリカンフットボールの歴史と大統領の関わり・・・第一章

第23話 アメリカンフットボールの歴史と大統領の関わり・・・第二章

第24話 アメリカンフットボールの歴史と大統領の関わり・・・第三章

第25話 アメリカンフットボールの歴史と大統領の関わり・・・第四章



久保田 薫 アメフト マンダラ

第26話 アメフト マンダラ・・・第一章

第27話 アメフト マンダラ・・・第二章

第28話 アメフト マンダラ・・・第三章

第29話 アメフト マンダラ・・・第四章

第30話 アメフト マンダラ・・・第五章

第31話 アメフト マンダラ 其の二・・・第一章

第32話 アメフト マンダラ 其の二・・・第二章

第33話 アメフト マンダラ 其の二・・・第三章

第34話 アメフト マンダラ 其の二・・・第四章

第35話 アメフト マンダラ 其の二・・・第五章

第36話 アメフト マンダラ 其の二・・・第六章

第37話 アメフト マンダラ 其の二・・・第七章

第38話 アメフト マンダラ 其の二・・・第八章

第39話 アメフト マンダラ 其の二・・・第九章



第1話 ローリングス社 (Rawlings Sporting Goods CO.,Inc.)

1887年ミズリー州セントルイスにジョージとアルフレッドのローリングス兄弟が釣具、猟銃、野球、アメフト、ゴルフ、ポロ、テニス等を中心にした総合スポーツ用品を扱う決して大きいとは言えないがアメリカで最初の通販専門の会社をオープンした。もちろんスポーツ用品のみを扱う通販店としても史上初めての店でもあった。

1898年資本家であったチャールズ シュダーと出会いパートナーシップを結び、工場を建て本格的なスポーツ用品の生産を始める事になった。

これが現在でもスポーツ業界のパイオニアそして北米最大のスポーツ用品のメーカーとして輝かしい足跡を残してきたローリングス社の発祥である。

野球・バスケットボール・アメフト等の用具及びユニフォーム、1997年からアイスホッケー、バレーボール、サッカー、ゴルフ等の公式球や用具も生産、スポーツウエアー、セーター等の衣類も数多く、各プロスポーツや有名選手のライセンス商品も多種生産し全世界に販売され、用具やボールは多くの大会で使用されている。

1902年にアメリカで最初のショルダーパッドを生産提供し、その後もメジャーリーグの全てと言っても過言ではないほどの選手に使用され、1920年に誕生した初のプロフットボールリーグでも使用されるようになった。全天候型の公式フットボールも同時期に生産された。

1906年メジャーリーグのカージナルスに初の野球用のユニフォームを生産し、1907年にメジャーリーグがローリングス社の公認球を使用するようになり、現在も生産を続けている。

1919年カージナルスのピッチャーだったビル ドウクが近代的なグローブのデザインを考案しローリングス社に生産依頼してきた。これが現在メジャーリーガーに愛用されているプロスタイルのグローブの発祥で今も多くのメジャーリーガーに好まれているモデルでもある。

このようにローリングス社はアメリカスポーツを支えてきたと言っても過言ではない。

特にフットボールではプロ向きの高価額のパッド類は別にして現在でも多くの選手に愛用されており、野球界でも現在でもメジャーリーグを支えているメーカーの中心的な存在である。余談ではあるが55年ほど前の日本ではまだ革製のヘルメット、ショルダーパッドが使用されていたが、50年ほど前に初めてローリングス社のプラスチック製のショルダーパッドが日本にも入荷し始め取り合いになったもので、以降ウィルソン社のものなども入荷してきたがローリングスのブランドには勝てず、その後ウィルソン社はヘルメット、ショルダーパッドの生産から撤退し、ショルダーパッドと言えばローリングスと言われるほどの地位を築いていった。



日本を席巻したショルダーパット
CP36シリーズ



Riddell

第2話 リデル (Riddell Sports inc.)

リデルと言えばアメリカン フットボールに携わった人ならず ヘルメットを思い出すでしょう。

そのフットボール ヘルメットのメーカーとして全米で知らない人はいないほど有名なリデル社は当時イリノイ州のエバンス高校の数学の教師でもありフットボールチームのコーチをしていたジョン テイト リデルが教え子の運動選手達により機能的で良いスポーツ用品を提供できないものかといつも考えていたが、遂には高校の教師もコーチも辞め1927年スポーツ用品造りに専念するためデス プレインズに小さな工場と言っても小屋のようなものであったが、とにかくスポーツ用品メーカーとして創業した。

リデルは創業の5年前の1922年に天候やグラウンドの状況などに合わせてサイズを替えたりするのに、いつでも自由に取り外しの出来る最初のフットボール シューズ用クリーツをデザインし実用化した人物でもあった。

そして、本拠地をシカゴに移し最初のクリーツ取り替え式のソフトボール シューズを生産し、1939年にやはり初めてのモールドタイプ（型に材料を流し込む方法）のバスケットボールを完成させた。同じ時、それまで布や革製のヘルメットで多くの頭部の負傷者を出し、競技自体の存続も危ぶまれ創業者のジョン リデルが人生を賭して情熱を傾けてきた初の完璧とも言えるプラスチック シェルにサスペンション型（日本では吊り天と呼ばれ一世を風靡した）のフットボール ヘルメットを開発し販売されるようになった。



吊り天と呼ばれた
サスペンション型ヘルメット



最新のスピードクラシック
ヘルメット

その後第2次世界大戦が勃発したが、リデルのプラスチック ヘルメットは米軍の全兵士が着用する事にもなった。そして、1945年創業者ジョン テイト リデルはスポーツ用品の開発に全てを賭けた人生の幕を閉じた。

その死の5年後の1950年、ジョンの意志を継承した技術者達は繋ぎ目のない一体型のプラスチック シェルと内部は色々な人の頭の形や温度にもフィットしやすいようなゴム状の材料とプラスチックを混合したサスペンションを開発し、爆発的な人気を呼んだ。当時のシカゴの大手新聞社のシカゴ トリビューン誌もこのヘルメットは画期的な開発で、

スポーツ界のみならず戦争でもアメリカに勝利と安全の保証をもたらした最大の用具でもあると絶賛した。

また、それまで殆ど見られなかったフェイスガードも当時のNFLブラウンズのエースQBで大スターでもあったオットー グラハムが着用し大きな話題をよぶこととなり、その顔に傷がつかなかったことで商品は爆発的にヒットした。

その当時現在のようなヘッドフォンによるスポッターシステムなどなかったが、やはりブラウンズのヘッドコーチのポール ブラウンからリデル社に依頼されQBのグラハムのヘルメットにレシーバーを取り付け、通常のラジオの電波を使って会話ができないかとの要望にすぐ実施したが、コーチとの会話とラジオの番組が混線したりで、もし敵のチームが気づいてレシーバーをつけたら二人の会話はすべて盗聴できたらろうと後日談として残っている。

このようにリデル社も最初は交換式クリーツの開発からシューズの生産、そして本業のヘルメットの開発生産のみであったが、今はユニフォーム、カジュアル ウェアー、各スポーツの練習器具、野球、ラクロス、バスケットボールなど多くのスポーツの関連商品を世界に向けて生産販売するようになった。



第3話 ウイルソン (Wilson Sporting Goods Co.)

1850年代にシカゴを本拠にカンサスシティ、オクラホマシティ、アイオワ州のシーダーラピッズなどで精肉業を手広く営んでいたシュワルツチルド & サルツバーガーという会社が1913年に片手間に皮革を使った運動用具の製造をアシユランド マニファクチャリングという部門で始めた。

この精肉業部門はあっという間に全米にそのシェアを上げていき、それは同時に会社の規模も一気に拡大していった、1930年代には従業員数4,500人、1960年代には従業員数17,000人となり1930年代の全米優良企業ベスト50にもランクされるほどであった。一気に巨大化した精肉業主体の会社も1916年には資金面で行き詰まり将来が危ぶまれる事態となっていた。

その時、やはりシカゴをベースに各地で缶詰工場を経営し資産家でもあったトーマス ウイルソンが資金援助をし、この精肉会社をあっという間に健全な会社に再建した。そして、同じこの1916年にトーマス ウイルソンが経営することになり社名も Wilson & Co. に変更した。

そして、トーマスは1913年以来精肉業の片手間にやっていたスポーツ用品の製造を主力商品に本格的に取り組み始めたのである。

その後1931年に社名も Wilson Sporting Goods Co. とし、全米屈指のスポーツ用品のメーカーとして知られるようになり、あらゆるスポーツ用品を手がけるようになっていった。

1970年に巨大飲料会社グループのペプシコに買収されたが、1985年からは再び単独で企業活動をするようになった。アメリカではスポーツ用品メーカーとしては Rawlings と並び称されるほどの信頼と実績を誇っているが、同時にアメリカの誇りでもあった。

アメフト、野球、ソフトボール、テニス、バスケットボール、ゴルフ等の用具・ウエアー類を生産しているが、アメフト用品としては現在はボールが中心でヘルメットやショルダーパッド類は生産していない。

ボールはスーパーボウルの使用球、大学の試合球、日本の X リーグの公認球などを生産しており子供からプロ選手まで愛用者は多い。また、ショルダーパッドはかつて49ersのQBというよりNFLを代表するスーパースター であったジョーモンタナ（1979年～1992年）がウイルソン社のQB用のショルダーパッド 77-QBR という通常のカタログに掲載されていたモデルを使用し、当時 日本のQBでもこのモデルを着用していた選手はかなりいたのではないかと思います。

もちろん、日本にも来た事がある上にあのモンタナが使用と言うことで品切れが続発するほどの人気アイテムでもあり、NFLのレシーバーもこのモデルを随分使用していたものです。

77-QBR/M,L/QB,WR用,胸部補強





第4話 シャツト (Schutt Sports Manufacturing Co)

リデル、ウイルソン、ローリングスのヘルメットが日本に普及したのに比べるとシャツトのエアーサスペンションヘルメットの日本への入荷は遅く、当時BIKEのブランドで既にアメリカで急速に普及し始めていたヘルメットを、後にBIKE社からシャツトスポーツ社が買い取りSCHUTTのブランドとしてより人気の高いヘルメットとなった。

シャツトスポーツは、本来はバスケットボールのゴールをはじめとしたバスケットボール用品を主に生産し、その後フットボール用のフェイスガードが主力商品となり全てのメーカーのヘルメットにシャツト社のフェイスガードが使用されるようになり、それを契機にバスケットボール用品はもちろんアメリカン フットボール、野球、ソフトボール等の用具を生産するようになっていった。

そのシャツト社の創業は1918年でビル シャットがイリノイ州リッチフィールドでバスケットボールのゴール等を製造する工場からスタートをきった。

そして1935年、のちに主力商品となるアメリカで最初のフェイスガードを製造した。だが、当時はまだフェイスガードの装着は強制ではなかった。

1962年、フットボールではフェイスガードの装着が義務づけられると、そこに目をつけたデルハンフリーが会社を買収した。

ハンフリーはその翌年、当時は一度取り付けたフェイスガードは簡単に取り外す事ができなかったが、プラスチックのホルダーとビスでのアタッチメントシステムを考案し、いつでも簡単にヘルメットから着脱できるよう改革した。

1973年にはそれまでフェイスガードのカラーはグレー1色だったのを初めて8色のカラーのフェイスガードを作った。

1973年の第3回スーパーボウルで下馬評では不利であったジェッツへの評価に「ジェッツの勝利は俺が保証する」と自ら断言し、言葉通りチームを勝利に導いた事でも有名なQBジョーネイマスが特注のシャツト社のフェイスガードで登場しMVPにもなった。

当時、このフェイスガードはネイマス型と呼ばれ同型のものは品切れが続出したほどであった。

1974年、現在では主流の最初のエアーフィッティング方式のヘルメットを開発した。

1984年には野球ヘルメット用の初のワイヤーフェイスガードを開発生産した。

1986年、元ピアノ教師であった女性のジュリーニモンズがシャツト社の社長に就任したが、彼女は就任後日本のフットボール、野球の普及度などを自分の目で確かめたいと来日し、大阪にも数日滞在した。後にヘルメットのメンテナンスに対しての感謝状が当社にも送られてきました。

以降、ヘルメットの改良は年々行われ、エアーフィッティングヘルメットでは不動の地位を築き、野球界やソフトボール界でもMLBのワールドシリーズのロゴ入りベースを提供したり、2004年の北京オリンピックのソフトボール出場

チーム8チームのうち、金メダルを獲得したアメリカを含む5チームはシャット製のヘルメットやキャッチャー用プロテクター等を使用していた。

もちろんフットボールのショルダーパッドや他のパッド類の開発生産も続けられ、多くのプロ選手や有名選手が使用している。





第5話 アメフトのヘルメットの起源は・・・ 第1章

アメリカンフットボールと言えばルールなど何も知らない人でも、あのカッコイイ（と本当にそう思われているかどうかは別ですが）ヘルメットと肩にパッドのようなものを入れた選手がやっているスポーツ？というような答えが概ね返ってくる事でしょう。

アメフトと言えばやはりヘルメットとショルダーパッドが一番に浮かぶのはそのアメフトという競技の発祥から発展の過程を顧みればよく判ると思う。フットボールの歴史については後日詳しく述べたいと思うので、ここでは簡単にふれておきます。

そもそもフットボールの起源については諸説がありますが、私が個人的に思うのは発祥は中国の「蹴鞠」（ケマリ）で、それが中国とヨーロッパを繋ぐ東西交易の通行路であった「シルクロード」を通じて多くの商品とともに文化やスポーツもギリシャ、ローマにも伝わっていき蹴鞠も後に古代ギリシャで「ハルパストン」という球技として発展していったと思われる。

フットボールといっても世界でアメリカのみがアメリカン フットボールの事を指しておりカナダではカナディアンフットボールを指し、南米やヨーロッパではフットボールといえばサッカーの事であるが、そもそもサッカーという競技が正式に誕生したのは1863年でそれまでは足で蹴ったり、ボールと思われるものを手で運んだり人数やフィールドの大きさなどのルールが全くなく、球を使った格闘技（ハルパストン）もしくは町と町との戦争のような雰囲気のものもあったほどである。



(写真1) Nicholas Manson 著

FOTTOBALLより

19世紀初期はそれらの球技をすべて「FOOTBALL」という言葉でひとくくりにしていて、イングランド（現在のイングランド南部）でもフットボールという競技をやっていたが一般的によく云われている1823年ラグビー高校（写真1）でサッカーの試合中に選手が足だけしか使えないことにはがゆくなり、エリスという選手が思わずボールを持ってゴールまで走り出した事がきっかけでラグビーフットボールが誕生したというのが通説ですが、前述したように当時は全国各地で独自のルールの基、ボールを蹴ったり持って走ったりするという球技が行われていた。

それらをイングランドはきちんと統一しようということで1863年に「ASSOCIATION FOOTBALL」（写真2）という組織が作られ、これが後にサッカー（ASSOCIATIONのSSOCにERをつけアソシエーションをやる人という意味から名付けられた）と呼ばれるようになったが現在日本でもサーカー部をア式蹴球部という名前を使用している大学もあるが上記の経緯から理解できると思います。



(写真2) 1863年の

「ASSOCIATION」のメンバー

Nicholas Manson著

FOTTOBALLより

当然、ラグビーが誕生したと云われる1823年にはまだサッカーという競技名はなかったはずであり、サッカーの試合中というのは違うのではないかと思われる。そして、「ASSOCIATION FOOTBALL」と同時期に現在のラグビーの基となる「RUGBY UNION」も誕生することになり、ラグビー フットボールが誕生しました。日本名を辞書で調べるとラグビー フットボールの事をラ式蹴球と書かれているはずです。

ちなみにアメリカン フットボールはア式蹴球が妥当かと思われませんが既にサッカーで使用されているので辞書には米式蹴球とあります、戦時中はアメフトに限らず敵国用語は使用しないということで野球用語などもすべて無理やり日本語化された感があり、アメフトもヘルメットやパッドを装着している格好が鎧（ヨロイ）、兜（カブト）を連想させ「鎧球」（ガイキュウ）と呼ばれていた時代があった。



さて、このラグビーと云われていた球技がイングランドからアメリカ東部に上陸し、当時アメリカの代表的な大学のリーグであったアイビーリーグでもラグビーの対抗戦が行われていたが攻守が明確でないということで、ルールを作りより明確に攻撃権を得られるようにという発想から現在のアメリカン フットボールの原点でもある「ボストン フットボール ルール」（写真3）というものを取り入れ攻守交代を明確にし、現在のアメリカン フットボールに引き継がれてきた。

(写真3) A Random House book

THE STORY OF FOTTOBALLより

ラグビーに熱中していた東部の大学生だがそれまで禁止されていた腰から下へのタックルが1888年にルールで許され、その事によって観衆にとっても選手にとっても球技というより格闘技に近くなり一層熱狂することができた。その反面、競技者にとっては負傷の度合い、特に頭部の負傷が急激に増加する事となり危険度も増した。

だが、カレッジ フットボールでは1939年までどんな用具の使用も強制されるようなルールはなくプロでさえも1943年までは強制的な用具の着用のルールにはなかったほどである。余談ですがヘルメットを着用しないで試合に出続けた最後のNFLの選手は1940年のプロ王座決定戦のシカゴ ベアーズ 対 ワシントン レッドスキングズの試合で70-0という大差でレッドスキングズを下したベアーズの伝説の名ラインバッカーとして君臨していた鉄人ディック バドカスだと云われている。



第6話 アメフトのヘルメットの起源は・・・ 第2章

最初のヘルメットとして伝えられているのは、1896年にラファイエット大学のジョージ バークレイがデザインし馬具メーカーで作ってもらった5cmほどの皮ベルトのようなものを十文字に縫い合わせ、頭の形に合わせて裁断し着用したものでヘルメットというより現在のラグビーのヘッドギアのような形状のものだったと云われています。（写4）



しかし、一般的にはもう少し前にヘルメットの起源と呼ぶに相応しい話が残っている。それは1893年の伝統的な対抗戦であるアーミー（陸軍士官学校）対ネイビー（海軍士官学校）の試合で、後にネイビーのパイロットの父と呼ばれるようになったジョセフ リーブスが彼の頭部へのケガを心配したガールフレンドがモグラの皮で作ったヘッドギアを着用して登場した。ガールフレンドが作ったかどうかの真偽は定かではありませんが頭部に着用していたのは事実です。

（写4）1890年代初期のヘルメット

Simon And Shuster著
NFL 1st 50 yearsより

それでも、試合後リーブスは大学の医者から試合中にもっと頭を蹴られて死なないようにすぐにフットボールを辞めるよう忠告された、がもちろん辞める気は毛頭なかった。



そこでリーブスは近くの靴屋に行き、自分の頭蓋骨をしっかりと護れるように頭部を覆う形の皮革製のヘルメットやパイロットのヘルメットを改良したもの（写5）などを作ってもらった。その後ゆっくりではあったが1915年には衝撃の緩和のためにクッション材を詰める工夫がされたり、サイドラインからの指示がよく聞こえるように耳の部分に穴を開けたり、現在のヘルメットの形状に近いものが登場しはじめた。

（写5）1915年耳穴のあるヘルメット

Simon And Shuster著
NFL 1st 50 yearsより

また、QBが相手の守備の選手とレシーバーが競り合った時にすぐ自軍の選手であることが判りやすいように特別な選手の革製ヘルメットにペインティングしたチームが現れ始めた。そして、ミシガン大学が皮の繋ぎ目の模様に合わせて全選手のヘルメットにチームの象徴としてチームカラーを皮の継ぎ目に合わせてペイントしたのに続き、NFLは1948年に当時ロサンゼルスを本拠地にしていたラムズが角をイメージしたロゴをヘルメットにペイントしたのが最初であった。

では頭部を保護するものがなかった時代はどうしていたのでしょうか。1939年に用具の装着の義務がルール化されても1940年代の初期にはまだ何も装着せず競技している選手が、殆どの選手が皮革製のヘルメットを装着しているにも拘わらず数人みられた。(写6)



(写真6) 着用が義務化されてもつけていない選手も見られる

Simon And Shuster NFL 1st 50 yearsより



1936年関東大学フットボール
リーグのルールブック

日本にアメフトが正式に認められ、その当時の1936年関東大学フットボールリーグのルールブックの用具の最後の項目に特別注意という項が設けられ「競技規則委員は競技者にヘルメットの使用を要求す。」と明記されています。驚いた事にアメリカから日本に渡ってきたアメフトにも拘わらず、1939年にヘルメット装着の義務化を決めたアメリカよりも3年も前に関東大学リーグのルールブックに明記されている事実は日本の安全に対する考慮がいかに大きいものであったかを証明しており、当時の指導者達の競技者への安全の思いが充分感じられる項目でもある。

いずれにせよ、ラグビー形式のフットボールを行っていた当時から頭部への負傷は大きな問題にはなっていた。だが、用具を開発するということまでは至らなかった。そこで、選手は自主的に自身を護るしかなかったのである。

そこで、頭部への衝撃を和らげたり切り傷から護る為に頭髪を少しでも長くし決して短くはカットしなかった、中にはヒゲの濃い選手は口ヒゲをできるだけ長く多く伸ばし、それで鼻や口を保護していたという。そんな大変な過程を経て次に大きな改革が見られたのは頭蓋骨とヘルメットのシェル(まだ皮革製だった)の間に空間を設けるタイプのもの、いわゆる吊り天式サスペンションと呼ばれるシステムが登場した時であろう。それまでは頭部とヘルメットの間には多少の緩衝材的な役目をした布やゴムなどがあったとはいえ殆ど頭蓋骨とヘルメットは直接接触しているような状態で衝撃も多く、頭部の事故も多く見られた。

だが、布ベルトを吊り天井のようにヘルメットの内部にとりつけ、衝撃がダイレクトに頭蓋骨に届くことが少なくなっていた。

これは1905年にシカゴトリビューン新聞のトップ記事としてフットボールで18人の死者と159人の重傷者を出

し、血だらけの選手の写真が掲載され、全米の注目を集めることとなり、国会でもフットボール廃止案が議論された。

しかし、時の大統領であったセオドール ルーズベルト大統領がまず青少年の体力増強プログラムの導入と安全な用具の開発をメーカーに呼びかけ存続を決定した、結果として一時廃止案も出たフットボールの競技においてもアメリカの文化という意味でもこの決断は大きく画期的な決断でもあった。

1917年、イリノイ大のコーチがデザインしたこのシステムのヘルメットを最初に生産したのがローリングス社とスポルディング社であった。

そして、いよいよ皮革製ヘルメットからプラスチック シェルの誕生を迎えフットボールも大いなる発展に向けて歩むのである。



第7話 アメフトのヘルメットの起源は・・・ 第3章

最初のプラスチック ヘルメットの誕生はリデル社のコラムで記述したように1939年にリデル社の創業者でもあるジョン テイト リデルによってもたらされた。最初にチンストラップが開発されたのもリデルであった。

それ以降のリデル社による様々な開発はそのコラムを参考にいただければ幸いです。(リデル社コラム) また信じられない話ですが、最初に作られたプラスチック ヘルメットの上部は半円形ではなく平らだったが当たった時に相手に負傷を与える危険性が多いということで角が削られ半円形にして丸みをもたせ、ぶつかっても滑りやすくして負傷しないように考えられてできたもので、頭部が丸いから当然それに合わせて作られたと思いがちですが実際は違う理由でした。

その後のヘルメットの大きな変革は、同じく私のコラムのシャット社の項で述べた現在の主流でもあるエアーフिटティング方式のサスペンションが取り入れられたことでしょう。私もこのヘルメットの変遷をアメリカで目の当りにしており色々な体験をしているので古い話ですが現実的にエア調整式ヘルメット誕生の瞬間に立ち会えた事は光栄であり、是非その誕生までのストーリーを紹介させていただきたいと思います。

キュービィ クラブ創業後の1975年ごろアメリカ国内のメーカーや大学のチーム、NFLのチームなどを訪問している時にミシガン大学の大学病院の脳外科医であったリチャード シュナイダー先生が脳への傷害を著しく減少させられるヘルメットを開発したというニュースが入りました。

すぐ連絡をとり当時フロリダの研究室におられた先生を訪ねることになり実際にそのヘルメットを手に取り色々説明を受けましたが実際にはこの2年前から開発していたと聞かされました。



(写真7) バイク社ヘルメット、と
サスペンション

まず驚いたのがそれまでもリデル社からエアサスペンション方式のヘルメットが開発されていましたが、リデルのものは小さな5cm角ほどのビニールのシェルに空気と液体が入っており、そのシェルが側頭部、後頭部、頭頂部に数個づつユニットとして取り付けられていたものですが、リチャード先生の開発されたものには蛸の足のようなブルーの細い管状のチューブがヘッドギアのような形で2重にはめ込まれており(写7)、このチューブだけ頭上に乗せてプレーしてもラグビーのヘッドギアよりも衝撃は少ないのではと思えるほどのものでした。

ただ、そのサスペンションを挿入する為、シェルは本当に蛸壺のように細長く大きく、しかも重いというのが実感でした。

その当時、まだ正式にはどこのカレッジもNFLのチームも使用している選手はなくモニターとして有名大学、プロチームに配布しテストしてもらっているということでした。

70年代バリー スウィツァー ヘッドコーチのもとウィッシュボーン フォーメーションからトリプル オプションを駆使し全米チャンピオンに輝き、NFLのチームにも勝つのではと噂されるほど圧倒的な強さを誇っていたオクラホマ大学にトリプル オプションの指導を仰ぐとフロリダから立ち寄り、オクラホマ大のロッカールームを見ると、何とリチャード先生の開発したヘルメットが各レギュラー選手のロッカーに置いてあり、後にNFLのバッカニアーズのドラフト1位にもなり身長は2m近く、体重は120kg近くにも拘わらずそのスピードは驚異的で超有名であったDEのリーロイ セルモンがそのヘルメットをテストすると言ったので 楽しみにフィールドに出ました。

ところが30分もしないうちにセルモンはそのテスト中のヘルメットをトレーナーに渡し他のヘルメットにかぶり替えた、もちろんどうしてかすぐ聞きにいった。

予想通り余りにも重たいというのが最初の返事で、そのかわりいいことはいくら強く当たっても殆ど衝撃を感じないということであった。

ただその重さは首への負担を考えると普及するには大きな問題でもあった。そこで、サポーターのメーカーとしても有名であったBIKE社（後にヘルメット部門はSchuttが買収）がリチャード先生をヘルメット開発担当責任者として採用し、本格的に軽量化の実現に向けてヘルメットの開発のスタートをきった。

そして、軽量化に成功したエアフィッティング ヘルメットはミシガン大学が正式に使用し、アツという間に全米に広がることとなった。

もちろん、日本にも入荷したがやはり軽量化されたと言っても重さは他社のものと比べると重かった、しかし衝撃度の軽さは圧倒的によく日本でテストしても大型の選手や守備の選手には好評であった。

その後、バイク社からシャット社に買収されたが当社が輸入販売を始めた時はまだBIKEのブランドであった。ちなみに日本の選手で最初に着用したのは関西学院大のラインバッカーの選手であった。



そして、今やヘルメット云えばリデルとシャットの2大ブランドの時代だが、ローリングス社が最初のヘルメットメーカーであるというプライドを持って2011年から新しくヘルメット（写8）の生産を開始し販売を始め、アメリカでも評判は上々のようである。

（写真8）2011年現在、ローリングスの最新ヘルメット QUANTUM



第8話 アメフトのヘルメット以外の装具の歴史 第1章

アメリカン フットボールに於けるヘルメットやチンストラップの着用がルールで正式に義務づけられたのはアメフトが誕生して70年も経った1939年であった事は前章のヘルメットの起源でも述べた通りですが、ショルダーパッドもほぼ同時期に着用が義務化されました。

創生期の1870年ごろのフットボールの試合ではもちろんルールで定められた装具などなく、頭部は自らの髪を伸ばすことで護り、あとはキャンバス地のような分厚い生地のできたセーターのような上着とヒザまでのズボンとストッキングを着用して競技を行っていました。

しかも、それまで選手の数に特別な取り決めも、フィールドの大きさも決まったものはなくただボールを奪い合いゴールを目指すというラフなゲームであった。

アメフトの誕生と云われている1869年11月6日にニュージャージー州ブランズウィックで行われたプリンストン大学とラトガーズ大学の試合は選手の数やフィールドの大きさなどが決まられたものだったが、それでも現在のアメフトからはとても想像できないほどサッカーとラグビーに近く、各チームの選手は25名でフィールドは横が75ヤード、縦が130ヤードというもので試合球も円形のサッカーボールであった。

現在の楕円形のボールに近いボールが使用されたのは1875年とされているが、当時はラグビーの対抗戦が各大学で実施されていたので多分ラグビーボールが使用されたものと思われる。



1800年後期になっても肩や腰などを護る正式なパッドはなく選手自身が工夫しなければならなかった。そこで肩の部分に綿を入れたパッドを縫い付けたジャージを着用する選手が登場しはじめた。(写真1)

(写真1) 1899年肩パッド付シャ

ツ

THE STORY OF FOOTBALLより

by Robert Rokey

1905年に18人の死者と159人の重傷者を出すに至るまでルールの大きな変革もなかったが、この事でアメフト廃止論も論議されるようになり1910年にNCAA（全米大学体育協会）が設立され、負傷を少なくするための戦術（代

表的なものとしてランプレーだけだったのを前パスの承認によりコンタクトを少なくした) やルールを採用し、装具についても徐々にではあるが装具の義務化や取り決めが行われていった。



1920年代に入ってヘルメット同様皮革製のショルダーパッドが作られ全員ではないが着用する選手が現れ始めた、ジャージにも5cm幅ほどの皮を縦に縫い付けて肋骨など胸部を保護する選手もいた。

(写真2)

(写真2) 皮を縫い付けたジャージ

THE STORY OF FOOTBALLより

by Robert Rokey



もちろんその当時は他のパッドについても取り決めがなかった。史上最高のアスリートと云われるジムソーブを育てたグレン ポップ ワーナー ヘッドコーチが、1905年に柔らかい布で作ったニイガードを選手に与えたという記録があるが、ヒップ(腰部)、サイ(太腿)、ニイ(ひざ)の各パッドを自身で選んだ皮や布などの適当な素材のものをパンツの中袋に入れたり、腰を護る為にパンツを腰の上部まで延ばしたものを殆どの選手は着用していた。(写真3)

(写真3) 1921年グリーンベイ

パッカーズのユニフォームを着る

アール・ランボー選手兼任コーチ

NFL THE FIRST 50YEARS より



(写真4)



(写真5)

1930年代に入ると皮革製でもきちんと肩のラインに合わせた現在のショルダーパッドの原型となるものが登場した。(写真4、5)

(写真4、5)NFL THE FIRST 50YEARS より



第9話 アメフトのヘルメット以外の装具の歴史 第2章



プラスチック製のショルダーパッドが登場するのは1960年以降で柔らかいスポンジ状のパッドが内側に付けられ非常に安全なパッドが作られるようになった。（写真6）

（写真6）ローリングス社製ショル

ダーパッド

ではその装具を覆っているジャージイはどうだったのでしょうか。サッカー、ラグビー、及びイタリアではカルチョと呼ばれていた球技をひとくくりにしてフットボールと呼ばれていたころはスポーツというより遊びから闘いという広い範囲での球技でもあったと思われる。選手の人数もフィールドの大きさも決められたものはなくボールも動物の内蔵に砂やボロ布を詰めたものが使用されており、その起源も戦争で切り取った相手の王の首を投げたり蹴ったことからだという説もあるほどで、ユニフォームなどとても存在するはずがありません。

色の規制や番号を付けるとか選手を認識する必要がなかったため選手が好き勝手なものを着用していたと思われます。

正式にユニフォームとして認められているのは1875年のハーバード大とイエール大の伝統の試合で両選手が着用したもので厚手のキャンバス地で作られたものですが、そのモグラの皮のような分厚い生地で作られた番号のついていないジャージイの下にもし布等のパッド状のものを入れているのを見つけられるとチームメイトから弱虫と罵倒されるのが当時の風潮でした。



そして、1876年のイエール大（アメリカン フットボールの父と云われているウォルター キャンプも後列の左から4番目に写っている）は中央でボールを持っているキャプテン以外は全員キャップをかぶり、前にチームの頭文字のYと刺繍されたジャージイと細身のパンツ、ストッキング、もっと驚かされる事は当時ブーツと云われたハイカット シューズを全員揃えて履いていることである。（写真7）

（写真7）1876年優勝した時の

イエール大のメンバー THE STORY
OF FOTTOBALLより

また、ヘルメットさえも着用していない時代にネックロールなどあるはずがないが、当時のプリンストン大の選手達は防寒の意味もあったが頭髪を伸ばして頭を保護したように、首を保護する意味でもタートルネックのジャージイを着用していた。（写真8）



(写真8) 1899年プリンストン

大のメンバー THE STORY OF
FOTTOBALLより

そして、ジャージの前後に正式に番号を付けるように決められたのは1937年になってからである。そもそも、1889年に最初のオールアメリカン チームが発表されたが1915年までその選手の名前をハッキリと認識できなかったことが原因でその為にユニフォームの前後に番号がつけられることになったのである。

その後ボールを持てる選手とそうでない選手を区別しやすいようにポジション別に番号を決めたのは1967年になってからである。では少し息抜きにユニフォームにまつわる嘘のような本当の話を書いておきましょう。1954年に83才で亡くなったアメリカの最も偉大なコーチの一人に挙げられ、ユース フットボールの普及にも熱心であったグレン ポップ ワーナーは数々の名勝負を残しているが、トリック プレーや奇策のアイデアでも群を抜いていた。

まだユニフォームの規約がない頃、自軍の選手全員の胸に大きくフットボールの絵を描いたジャージを着せ試合に臨んだのである。目的は誰が実際にボールを持っているのかわかりにくくするためであったが、実際相手のチームは混乱したという、しかし審判にとがめられることはなく大勝した。その後、ジャージの色はボールと同じ色のものはダメという規約ができボールの絵などを描くことも禁じられた。



第10話 アメフトのヘルメット以外の装具の歴史 第3章



(写真9) NFL The FIRST

50YEARS より

球技で無くてはならないものと云えば当然のことですがやはりボールでしょう。アメフトも創生期はサッカーで使用されていた球形のボールでその後ラグビーボールを使用するようになったが、1896年ごろは楕円形状のボールということだけで細かいサイズや仕様の取り決めはなく1912年まではサイズの規定さえもなかった。(写真9)



(写真10) ナイトゲーム用の白色

ボール

NFL The FIRST 50YEARS より

1929年になってより細い弾丸型の形状のボールが許可され、更にナイトゲームの試合球として白色及び他のカラーボールの使用も許可されるようになり、これは1941年まで続いた。(写真10) その後1956年にはラバーボールが認可され、1982年にはボールに関する細かい規定が正式に決められるようになった。



(写真11) 1876年のイェール

大の選手の集合写真

次にシューズの製作が予想外に早くから行われていたことには驚かされる。1876年のイェール大の選手の集合写真(写真11)を見ると全員がハイカットシューズを履いており、しかもチームで揃えているのが窺える。

実はフットボールブーツと呼ばれたシューズの歴史はかなり古くからある。記録に残っているもので最も古いものは1526年の大英帝国時代のヘンリー8世王が履いていたと思われるもので、それはヘンリー8世王の1526年に使用されたとする荘厳な衣装部屋から発見されたリスト(今日のショッピングリストのようなもの)にヘンリー王のお抱え靴屋のコーネリアス・ジョンソンが1525年に4シリング(現在の13,100円ほど)で作ったと記録されている。

その現物は残されていないが現在のものより重く踝(くるぶし)の上までのハイカット仕様であったと云われている。

(写真12)



(写真12) 1526年のフット

ボールブーツ

それから300年後、英国でもフットボールが盛んに行われるようになり一般の競技者もフットボール用のシューズを履くようになった。

やはりハイカットで踵（かかと）の部分は鉄板でカバーされ靴底には金属の鋏がうたれていた。その後、ハイカットから現在のローカットになり靴底には金属の鋏の代わりに皮を円形に削り何枚も重ねた、後にクリーツと呼ばれるものを6カ所に打ちつけ、グラウンドで滑らないように工夫された。



1920年代に入ってから現在でも続いているアディダス兄弟によるシューズメーカーのようなフットボールシューズ専門の会社が現れ始め一層進化をした。その後アメリカに渡ったフットボールがアメリカンフットボールという独自のフットボールになった時にシューズもサッカーのものが6個のクリーツだったのをもうひとつ前に追加し7個とし、よりグラウンドにしっかりと踏ん張れるようにしたのである。

(写真13)

(写真13) 最新のナイキフット

ボールシューズ



アメリカン フットボールの起源と歴史



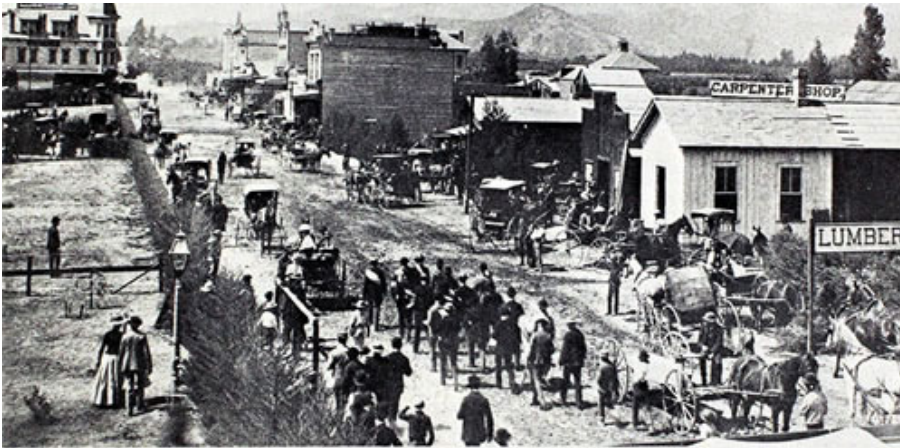
第11話 アメリカン フットボールの起源と歴史 第1章

～ フットボールからどのようにしてアメリカの No.1スポーツのアメフトになったのか～

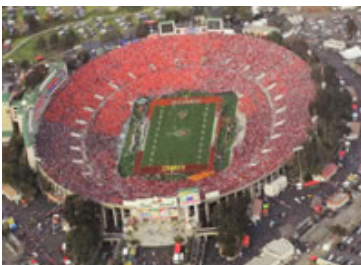


山車 (だし)

新年の1月1日、抜けるような青空の下、ロスアンゼルス郊外のパサディナにあるローズボウル スタジアムには、早朝から花や草花の種を使って何ヶ月もかけて作られた華やかな山車 (だし) が街の通りをマーチングバンドの奏でる軽やかなリズムに乗って誇らしげに行進するローズ パレードを観た後、そのままスタジアムに詰めかける11万人にも及ぶ大観衆が午後から行われるカレッジ フットボールに熱狂します。



1886年のローズパレードが行われたコロラド通り



ローズ ボウル

このローズボウルは1902年から開催されているが、年末から新年にかけて全米各地でこのようなカレッジのフットボール ゲームが開催され各地で8万～10万人の観衆を集め、それぞれの試合結果によりメディアなどの投票で最終的なランキングが決められ、その年のチャンピオンも決定され、これらのゲームに出場したチームには1チームに5～10数億円のギャランティが支払われ大学運営の資金にもなっている。

また、アメリカのプロ スポーツの中でも最高峰に位置づけられるプロ フットボール組織のNFL (ナショナル フットボール リーグ) の頂点、即ちプロの王座をかけて闘われるスーパーボウルは2月の第1または第2日曜日に開催されるが、この試合へのアメリカ人の関心度は言葉では表現できないほど凄いものがあります。全世界にテレビ中継されているが、そのCM料は世の中の不景気など何処吹く風で、僅か30秒のコマーシャルで300万ドル (2億4000万円) をくだることはなく、そのスポンサー枠は取り合いになるほど競争率も激しくCM料も上昇することはあっても下がるこ

とはないと云われるほどであり、視聴率も40～46%はあり占有率に至っては65%にもなり殆どのアメリカ人はスーパーボウルを観ていることになります。

世界中にある米軍基地の軍関係者もこの日ばかりは任務を休止しテレビに見入っている。

プロ野球、プロバスケットボール、プロホッケーなどある中でアメリカンフットボールが断トツの人気を誇りアメリカ社会に於いてはスポーツの領域を超え文化のひとつと云っても過言ではありません。アメリカでのフットボール人気之余にも凄いので、その理由を知りたく私も若い頃渡米し多くの関係者や指導者に会い参考資料などもいただきました。



NFLコミッショナー ピート・ロゼール
（右）

その時に感じた事はアメリカ人の懐の深さでした。もし私のような一個人が日本プロ野球のコミッショナーに歴史についてお聞きしたいということで面会の依頼をしたら100%に近い確率で会っていただけないと思いますし、日本では誰々の紹介とかいうのがないと会うことも難しいぐらいで、それが日本の社会ではごく当たり前の事でしょう。当時まだ大学を出て間もない頃で、ただフットボールに興味がある若者というだけで資格など何もありません。そんな時に自分勝手な好奇心だけで時のNFLのコミッショナー ピート ロゼール氏に面会依頼の手紙を出すと、いとも簡単に会っても良いという返事をいただき、2時間程もニューヨークの5番街にあるオフィスで色々教えていただき写真や資料もいただきました。その上帰国して1ヶ月も経たないうちに自宅に段ボール箱5ケースほどの当時のNFL所属の全チームのペナントや本、写真、資料等を送っていただきました。後にTBSでスーパーボウルの解説の話をして

いただきスーパーボウルの前夜祭のパーティに出席する度にいつも声をかけていただくほどでした。実はピート ロゼール氏と当時パンアメリカン航空の極東代表だったデビッド ジョーンズ氏（大相撲で昔 小太りの外国人が紋付袴を着て土俵に上がり優勝力士にカタコトの甲高い声で「ヒ・ヨー・ショー・ジョー」と言ってドッと沸く観衆を見ながら表彰状を授与していた人）の両氏は前職の広告代理店で机を並べて働いた仲で親友であったこともわかりました。ロゼール氏はその経験を買われロスアンゼルス ラムズの広報員として採用され、みるみるうちに手腕を発揮し弱冠33才でNFLのコミッショナーに就任するほどの辣腕であったが、会うといつも気軽に「デイヴィーよろしくね」という優しさを忘れなかった。

随分と横道にそれましたが、当時の私はアメリカンフットボールの事で頭がいっぱいで明けても暮れてもアメフトのことばかりでした。そんなある時に何故フットボールというのだろうか疑問を持ち調べてみようと思ったのが今回のフットボールの起源に触れるきっかけにもなりました。一体、サッカー、ラグビー、アメリカン、オーストラリアン、ゲーリックの各フットボール（FOOTBALL）は何故フットボールなのでしょう。中には古代球技の「ハルパスタンまたはハルパスタン」はフットボールの起源とも云われながら手を使って投げるハンドボールの起源でもあると云われているものもある。多分足で蹴る事から始まったから「フットボール」というのではないのか、というのが殆どの人の答えではと推察されますが果たしてそうなのでしょうか。

「FOOT」とは正式には踝（くるぶし）から下の部分を云いますが、蹴る動作で最も重要な部分である足の甲は横の部分も含めて何故か「INFOOT」と云い、足のつま先は「TOE」、かかとは「HEEL」、足の裏は「SOLE」と云います。

「蹴球」と辞書を引くと「サッカー、フットボールの事」とありますが、逆に「FOOT」には蹴るという意味はどこにもありません。蹴球即ちボールを蹴るという事は「Kicking Ball」ということが本当の意味でしょう。では、空気など注入することを知らなかった時代の人たちはボールをどのようにして蹴っていたのでしょうか想像してみてください、袋状の何かに砂や土を入れて足で蹴る場合、足の甲で蹴ったりしたら重くて飛ばすこともできないし、足を痛め

る可能性のほうが大きいと予測されます。蹴るという行為ではなく転がしていたのではないのでしょうか。



1500年代 フットボールの試合中
ボールに空気を入れている（写真1
A）

FOOTBALL by Nicholas Mason

その後、動物の膀胱に空気を入れたり、布や羽根などの軽いものを詰めたりするようになったのでしよう。（1 A）実際、中国で行われていた蹴鞠（しゅうきく・けまり）での鞠はまさしく鹿の皮に羽根を詰めて使用されていました。この蹴鞠を英語的に云うと「FOOTBALL」ではなく「KICKING BALL」なのです。いずれにせよ、屁理屈には違いはないのですが、「フットボール」という言葉自体はボール状のものを蹴ったり、手で転がしたり動いてるボールを押さえたりしていた競技を総括してフットボールという名前で呼んでいたということで、その後それらから発展していった球技に全て「OOOフットボール」と名付けられたもので、足で蹴るからフットボールということではないのではないのでしょうか。



アメリカン フットボールの起源と歴史



第12話 アメリカン フットボールの起源と歴史 第2章

今から500～700万年前に猿人が誕生し、50万年前ほど前にその猿人から原人が誕生しその代表格が北京で発掘された北京原人で、15万年～4万年前には旧人と呼ばれるネアンデルタール人、そして4万年ほど前にヨーロッパの人類の祖先と云われる新人・・・即ちクロマニヨン人が誕生したと云われる。

このような人類誕生説が一般的には知られていることですが、実際のところハッキリとした事は未だに謎が多く誰も断定には至りません。殆どは解明されているとは云えまだ推測の部分もあるということです。

そんな状況下でフットボールの起源など正確に判るはずもなく、公式に競技として行われた事実は各競技の歴史を見れば明確だが、果たして起源となるといつ何をもってして起源なのか疑問の残るのは当然であろう。原人時代の当時の民族は農耕を営み狩りをし、そこから様々な文明を生み出していき現代に至った、というのが大まかな人類の進化の歴史ではないかと思いますが、私は人類学者ではないので確かなことは判りませんが、進化の過程において自然進化のみならずいつの世代でも何らかの努力や工夫をして物事を前に進めてきた事は間違いないと思っています。

4万年前に新人と呼ばれるクロマニヨン人が前述したようにヨーロッパ地方の人類の祖先ではと云われているが、すでに火や道具を使用しており現代人の祖先に違いないことは間違いないでしょう。当然、新人あるいはそれ以前の旧人、原人、猿人、動物であっても生きるための行為以外で、何かで遊ぶというような行為も必ずあったと思います。

狩りは生きるためには欠かせない行為であり、その為の闘争というのも付帯事項としてあった事でしょう。38億年前に地球に生命が誕生した時から種の存続繁栄の為のあらゆる行為が行われてきたに違いありません。現在ペットとして飼われている猫や犬でさえピンポン球やゴムボール等を投げてやるとじゃれたり走って取りに行き口にくわえて飼い主のところに運んだりします。

当然、原始時代でも洞窟などでグループで暮らしていたような時に、何人かでその日の獲物の頭骨を蹴ったり奪い合ったり、または石を遠くに投げたり、槍のようなものを作り標的に向けて投げたりしてひと時の戯れを楽しんでいたことは容易に想像できます。

人類が誕生して現代に至るまで、いつの世も縄張り争いは絶えることがなく、過去の歴史はまさしく国盗り戦争即ち縄張り争いそのもので現代でも続いています。

ですから700年代のイングランドで戦いに勝った戦士達は奪った相手の王の首を持ち上げ雄叫びをあげ、その首を蹴って勝利に酔いしれたと云われています。侵略と闘争に明け暮れた時代背景から考えると特別に野蛮で残虐な行為とも思われず、むしろ自然な流れであったかも知れません。



1725年グリーンランドでフットボールをしているエスキモー

これが、後にボールを蹴るゲームに変化していきサッカーの原点になっていると云えるかも知れません。しかし、紀元前1500年くらいにはアンデスやチリ、紀元前800年にはメキシコのマヤ遺跡などからボールを蹴るという遊戯的なものがあったと云われ、紀元前200年には古代エジプト、古代ギリシャ、古代ローマなどの遺跡からは足でボールを蹴っているような人物のレリーフが発見されているのも事実です。



だが、中国にはそれより早い紀元前300年に蹴鞠（しゅうきく・けまり）という競技が宮廷内で行われ、球門（現在のゴールネット）が競技場の中央もしくは網の上に作られ、鞠を奪い合い球門に入れた回数を争うというものであったが、私自身はサッカーの起源はこの蹴鞠だと思っていますが、日本でも600年代に中国から仏教とともに伝来し平安時代に流行し、現在でも時折当時の服装で鞠を蹴っている姿をTVのニュースなどで見られた事があると思います。アメリカの文献にも紀元220年の終わりの中国の皇帝の誕生日に絹のカーテンにあげられた穴に鞠（まり）を入れるという球技が行われており、その球技はTsu-Chu (Kicking Ball - 蹴球)と呼ばれていたとあるが、これは文字通り蹴鞠の事だと思われます。

Tsu-Chu (Kicking
Ball - 蹴球)

蹴鞠で一番驚くのは使用していた鞠が鹿の皮に羽根などを詰め込んだり動物の膀胱に空気を入れた軽いものが使用されていたということです。この蹴鞠がモンゴルや東欧、そして東南アジアでは鞠を蹴るという意味のセパタクローとして伝来し現在でも盛んに行われています。

これらの事から考えると、中国と古代ギリシャ、古代ローマとの間での日用品、装飾品、絹などの産物の交易路だったシルクロードを通じて、産物と一緒に文化や遊戯、蹴鞠なども伝わったのではと思われます。それが古代ギリシャなどで行われていた町同士の格闘技のような競技であった球技ハルパストンまたはハルパスタム (Halpaston, Halpastum) として伝わったが足技だけではなくボールを手で投げたりしていたことからハンドボールの起源とも云われています。

フィールドは長方形でボールを投げて蹴っても手を使ってもよく、両チームともゴールラインを目指し、特別なルールもなく殆ど現在のサッカーやラグビー、ハンドボールに近い競技が2000年以上も前に行われていたことになり全ての球技の原点であるかも知れません。

同じ頃の紀元217年、大英帝国のフットボール チームがローマの宗教団体チームと町で試合をし勝っているが、これ

は「Shrove Tuesday Game」(シュローヴ チューズデイ ゲーム・・・キリスト教の4旬説の始まる Ash Wednesday (灰の水曜日)の前日の火曜日に行われる試合・・・)と云われ、教会の門などをゴールに見立てたりして当時は盛んに行われていた。

このように南米、中国、ギリシャ、ローマ、イングランド、フランス等各地にフットボールは広まっていったが、当時の時代背景からやはり宗教がらみが多いのは否めないだろう。いずれにせよ、古代のフットボールは大英帝国で飛躍的に普及発展していきました。ただ、古くからサッカーの起源説を信じて疑わない中国で紀元前1万年の地層から球状の石が発見され、中国の関係者はサッカーの発祥の大きな証拠だと大騒ぎになっているということだが、ボールのようなものが化石になって出現したのか、本当に石を丸く削って出来たものなのか詳細は判らず、仮にそうだとしたら石の球などとても蹴ることはできず、不可解な部分はまだまだ多いように思えます。



アメリカン フットボールの起源と歴史



第13話 アメリカン フットボールの起源と歴史 第3章



(写真・1) イタリア フローレンス
地方で行われていたカルチョ

話を元に戻すと、ローマがギリシャを征服すると同時に当然ハルパストンも受け継がれていった、そして15世紀になるとフットボールも大きく変わっていき、イタリアでもハルパストンを基盤に独自のカルチョ (写真・1) という球技が行われていた。

ヘンリーII世が即位した1154年からリチャードIII世が亡くなる1485年まで大英帝国を支配していたプランタジネット王家のエドワードII世は1314年、こともあろうに当時町の通りで行われていたフットボール ゲームの歓声や騒音が余にもうるさい事と、死傷者が多く出るほど危険であった事からフットボール禁止令を発令した。

FOOTBALL by Nicholas Mason

この禁止令は発令されてから約300年後の1608年まで解かれる事はなかった。

禁止令の期間中の1389年リチャードII世は更にフットボール以外のテニスなどの他の競技さえも禁止してしまった。

しかし、イングランド、ウエールズ、スコットランド等の大都市での監視はさほど難しい事ではなかったが、地方の田舎町の通りで楽しんでやっているようなフットボールを取り締まるほど目は届かず、禁止令の出ている期間中でもフットボールの人気は衰える事はなかった。



(写真・2A) 1627年イングラ
ンドの街中 (まちなか) で行われて
いたフットボール

例えばその期間中であった1539年に町の靴屋が34ペニーで皮のボールを作っていたという記録が残っており、前回の装具の項でフットボール ブーツの話を書きましたが、ヘンリー8世が禁止令の最中にも拘わらず1526年にお抱え靴屋にフットボール用のブーツをオーダーしたというリストが発見されている。また、ロンドンの刑務所では禁止令を破った囚人が12ペニーの罰金を徴収されたという記録も残っている。これらは英国人がいかにフットボール好きであったかという証でもある。(写真・2A)

そして、1608年禁止令が解禁された後、イングランド、ウエールズ、アイルランドで現在のゲールック フットボール (Gaelic Football) に近いと云われているフットボールが1チーム20~30名の選手達で行われていた。とはいうものの、17世紀、18世紀のフットボールはまだ明確なルールや定義はなく、ボールをドリブルしたり (Dribbling)、手で扱う (Handling) といった行為



(写真・2 B) 1700年代イングリ

ドの市場で行われていたフットボ
ール

がゴチャ混ぜのような状況でボールを持って走る (Carrying) という事はなかった。

(写真・2 B)



(写真・2) Eton Wall Game

FOOTBALL by Nicholas Mason

そして、1717年「Eton Wall Game」(イートン ウォール ゲーム) というラグビーフットボールの前身のようなゲームが行われ、1チーム18~20人でスクラムを組んでボールを壁に向かって足で運び、壁に到達すると今度はボールを壁伝いに足で上に押し上げ、最後に手でボールにタッチしたら得点になるという格闘技と曲芸を併せたような球技だが得点になることは殆どなく何年も無得点試合が続いたと云われている。また、観衆はボールを奪う為に相手を殴ったり蹴ったりしている選手をまるで闘牛や闘鶏を見るように壁の上から眺めていた。(写真・2)

現在でもイートン大学でセント アンドリュース デイに行われているがその当時は負傷が絶えず、1827年から10年間これも禁止されてしまった。そして、1840年「Field Game」(フィールド ゲーム) と呼ばれる1チーム11人でゴールを目指す危険度の少ないゲームとして再開されたが、手の使用の禁止が明確にされ、これが後のサッカーの原点のひとつである事には間違いのないでしょう。

ほぼ同じ時期に「Harrow Football」(ハロー フットボール) という球技も行われていたが、これはハロー校のみで行われており選手の数通常では11人だが上限に決まりはなく両チームの合意があれば7人以上なら何人でもいいということであった。また使用されていたボールが球形でもなく楕円球でもないという変わった形のもので、UFOかポーク ミート パイのような形をしており直径は45cm、高さが30cmとかなり大きなボールで泥んこのグラウンドで試合すると泥が付き水を吸ったりするので異常な重さになってしまう。

1793年、当時はまだ町の通りでフットボール ゲームが行われていた時代、赤色のシャツを着たシェフィールドのチームと緑色のシャツを着たノートンのチームが6人ずつの選手で闘ったが、シェフィールドを応援する大勢のファンがノートンのチームにプレッシャーをかける意味で大歓声をあげることで、死者こそ出なかったが多くの負傷者が出て大騒動になり、しかも試合は3日間も続いた。このシェフィールドのチームがその後クリケット クラブを編成することになるが、1855年には本来のシェフィールド フットボール クラブとなった。

その後、シェフィールド近郊に15のクラブ チームが誕生し、中でもシェフィールドにとって最大のライバルであったヘイラム フットボール クラブと1861年に地元の病院のチャリティ ゲームとしてブラメール レーンで600人の観衆を集めて行われ、シェフィールドが2-0で勝利を収めたが、この75年後に同じ場所で同じ対戦チーム同士で試合が行われたが、その時は68,000人もの大観衆が声援を送るほどになっていた。

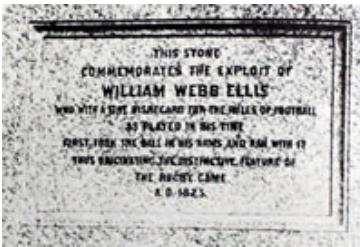


アメリカン フットボールの起源と歴史



第14話 アメリカン フットボールの起源と歴史 第4章

ハロー、ウィンチェスター、イートン フィールド ゲーム等の各フットボールは手を使うことはあってもボールを持って走ることを認めていない、即ち現在のサッカーの原点ともいえるボールを足でドリブルするフットボールを行っていた。



1820年ごろはまだボールを持って走ってもいいというルールが確立されていなかった。ところが1823年、ラグビー校でフットボールの試合中にエリスという少年が突然ボールを持って走り出し、一気にゴールまで駆け抜けた。これがラグビー フットボールの始まりであるという話は殆どの人が御存知の事と思います。(写真・3A)

(写真・3A) ラグビー校にある

1823年エリス少年がボールを持って
走ったと書かれた記念の銘板

この後世まで残るランを披露したウィリアム ウェブ エリスの名はフットボールが存続する限り決して忘れられる事はないでしょう。

ラグビー校を卒業したエリスはブレイスノーズ カレッジに進学し神学を学び、卒業後教会の牧師になったが、1872年1月24日に66才の生涯を終えた。



ラグビーという名前はここから名付けられた事は事実ですが、ラグビー フットボールの正式な起源かどうかは定かではなく、ボールを持って走ったという明らかな史料でこれより古い物は残っていないのが事実なのです。1841年にラグビー校のルール作成担当者が、これまでのフットボールのルールを明確にする事が必要で、ボールを持って走る事は正当な行為であると主張すべきだと提案した。だが意外にもラグビー校の学生達はラグビー ユニオンが組織化された3年後の1874年までそのルールを正式に適用することはなかった。現実に1872年に行われた最初のフットボール国際試合と云われているイングランド対スコットランドの試合は一度も手でボールを拾い上げる事はなかった。(写真・3)

(写真・3) 1872年スコットラ
ンド 対 イングランドの最初の国際
サッカー試合

FOOTBALL by Nicholas Mason

パブリック スクールを中心としたフットボールチームはオックスフォードやケンブリッジでルールの明確化について話し合っていた。

1837～1842年の間にケンブリッジでクラブ チームのメンバーが集まってルールの下案が作られた。そして、1848年にパブリック スクールを中心にした14人のメンバーで7時間かけてフットボールのルールが決められた、これが「ケンブリッジ ルール」と云われているもので現在シュルースバリー校の図書館に残されている。

当然、ラグビー校のメンバーもこの会議に出席していたがボールを持って走る事は認められず、徐々にこのグループから遠ざかっていくことになった。1863年の秋にはルール委員会での論調は激しい口調になり、ラグビー校のメンバーは遂に席を立つようなことが起こる。

それは、サッカーの関係者にとっては記念すべき日でもあり誰もが認識している歴史的な一日でもあった。

1863年10月26日、ロンドンのグレート キーンズ通りにあるフリーメイソンズ タバーンで多くのパブリック スクールのOB達、もちろんケンブリッジ大も席についたがこの会議には中立の立場で出席し、当時「Association」と云われていたそれまでの会合のメンバーと12のクラブの代表者が同席し、正式なフットボールの統一ルールを決める会議が行われた。

クロスバーのないゴールの使用やラグビーのルールなども取り入れる案も提案されたが、決定的な違いは13項目あるルールの中の第9項と第10項で、ラグビー スタイルの支持者は第9項をボールを持って相手ゴールに向かって走れるとし、第10項でもボールを持って走っている選手のスネを蹴っても、足を引っかけても構わないとし、他のメンバーはどの選手もボールを持って走ってはいけないとし、足をひっかけたり、スネを蹴るような乱暴とも思える行為は厳禁で、手を使うことも禁止するとした。



ここでラグビー フットボールと後にサッカーとも呼ばれるアソシエーション フットボールとの決定的な決別がなされ、逆にサッカーと呼ばれる語源の元となった組織「Football Association」が誕生し、このゲームを「Association Football」（写真・4）と云われ、前述したように「Association」の「Soc」を残し、それをやる人という意味の「er」が付けられ「Soccer」（サッカー）となりやがて世界に普及していった。

（写真・4）1875年の

Association Football

FOOTBALL by Robert Leckie



アメリカン フットボールの起源と歴史



第15話 アメリカン フットボールの起源と歴史 第5章



(写真・5) 1840年のラグビー

校でのラグビーの試合

FOOTBALL BY Nicholas Mason

これまでの過程を見ると「アソシエーション フットボール」の支持者のほうが圧倒的に多いように思えるが、パブリック スクールの多くはラグビー校を中心とするラグビー フットボール (写真・5) を支持し、特にスコットランドの東部やアイルランドではその傾向が強かった。



(写真・6) 1882年最強と云わ

れたオックスフォード大のラグビー

チーム

FOOTBALL BY Nicholas Mason

そんな時、リッチモンド クラブの選手がラグビー方式のフットボールの練習試合での事故が原因で死亡した事がきっかけで、1871年1月にブラックヒースとリッチモンドの両クラブが提案したトラファルガー スクエアの近くのコックスパー通り沿いのポール メール レストランで会議することを2チームに連絡した。だが1チームだけ泥酔して場所がわからなくなった為、結局21チームのメンバーで会議が行われ再度ルールの確認がなされ、遂に1871年「フットボール アソシエーション」に対抗するようにラグビー フットボールの支持者達によって「ラグビー ユニオン」(写真・6) が設立されることになった。

そして、エリスが亡くなって1年後の1873年にオックスフォード大とケンブリッジ大の最初のラグビー対抗戦が行われた。

サッカーを支持するメンバーは相手のスネを蹴るような行為は危ないだけではなく、どう考えても紳士的なスポーツとは思えず卑怯者のする事だと言いつつこの行為に反対したが、ラグビー派はそのような行為は男としての精神修行(日本で云う根性試し)であると言いつつ張った。

しかし、単なる負傷にとどまらず骨折者も続出するような状況であった事も事実であった。そんな中でもラグビーを支持する人々は「ラグビーは紳士のスポーツである」と言いつつ張った、その所以は試合が終われば敵味方はなく観客席も対戦相手同士が離れて応援するように設置しないなど(実際は運営上の問題などでそんなことはないようだが)、試合が終わればどちらのサイドもなくひとつであるという意味での「ノーサイドの精神」、それと試合が終わった後にひとつの部屋で両チームと一緒に軽食をとるといった習慣などからきているが、これらはまだサッカーやラグビー等とハッキリ分けられていない「フットボール」とボールを扱う競技を全てひとつくりにしていた頃からこのような習慣はあったので他の競技

大会でも行われているものもあるが、その一部分をラグビー ユニオンが引き継いだということではないだろうか。

私自身、早稲田大学でアメリカン フットボール（早稲田大では正式には現在でも米式蹴球部、ちなみにサッカー部はア式蹴球部です）をやっていました、在学中は毎年春の早慶戦に限っての事でしたが、試合前は球技場の大きな部屋に両チーム全員が集まり、サンドイッチと飲み物の軽食をとりながらお互いの新入部員の自己紹介があり、歓談のあと両校の校歌を交換し健闘を誓いグラウンドに出るという習わしでしたが、現在は定かではありません。

また、1980年代に知人のプリンストン大学のOBで1951年に最も優秀な選手に贈られる最高の荣誉でもあるハイズマン賞を受賞したディック カズマイアー氏（写真・7）に招待されアメリカでの伝統的な対抗戦であるプリンストン大とイエール大のアメフトの試合を観戦した時も試合終了後にスタジアムの大食堂に名だたるOB達も出席の中、両校がエールの交換をし軽食をとりながら歓談するひとときを体験しました。アイビーリーグの対抗戦では100年以上も前から全ての学校で同様に行われているということでした。「英国紳士」という言葉で知られるように英国がかかわるものは紳士的とみなされ、ラグビーも英国から世界に普及していったスポーツである為、必然的にラグビーも紳士のやるスポーツという事になったのではと思います。いずれにせよ、現在のサッカーとラグビーはフットボールという用語で一緒にされていたものが、ここでハッキリと袂を分かつ事になりました。



プリンストン大学時代のディック カズマイアー



（写真・7）カズマイアー邸でハイズマントロフィーを囲んでカズマイアー氏（右）、筆者（中央）

だがその情報を聞きつけたスコットランドから「ラグビー ユニオン」に発足後3ヶ月も経たないうちに試合の申し込みがあり、イングランドはスコットランドまで遠征するがイングランドはまだ「アソシエーション フットボール」の試合と思いついていたところ、スコットランドがボールを持って走り出しゴールを決められ、イングランドは唖然としルール違反だと猛抗議し、初の国際試合ということで帯同してきたサポーター達もこの試合は無効だと收拾がつかないほどの大騒ぎになったが、この歴史的なゲームの主審を務めたアーモンド氏は結局大騒ぎした方を敗者とするという信じられないような判定をしスコットランドに軍配をあげた。

このように「ラグビー フットボール」はしばらく「アソシエーション フットボール」との間でギクシャクした関係が続いたものの、愛好者はどんどん増え、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、南アフリカなどの国にも普及していった。

このラグビーをニュージーランドのネルソンという町からイングランドに留学していた青年が故郷に帰りそのラグビーフットボールを教える事になるのだが、ネルソンでは元々サッカーが行われていたがその一方でオーストラリアンフットボールの原型と云われている「ヴィクトリアンルール」という球技を行っていた。そして、「ラグビーユニオン」が発足する7ヶ月前の1870年5月14日、ニュージーランドで初のラグビーフットボールのルールで「ネルソンクラブ」と「ネルソンカレッジ」の間で試合が行われ、このゲームが後のラグビー王国を築くことになった。



アメリカン フットボールの起源と歴史



第16話 アメリカン フットボールの起源と歴史 第6章

「アソシエーション フットボール」も「ラグビー フットボール」もイングランドから世界各地に普及していったが、イングランドが1707年に植民地化を計ったアメリカ大陸も同様だったと考えられます。それは1492年にコロンブスがアメリカ大陸に到達して約200年後に起こった。

16世紀、大英帝国教会に異を唱える人々は弾圧を受けていた。そこで、1620年の夏、サザンプトンからアメリカ大陸のヴァージニア植民地に向けて2隻の船で出帆した、だがスピードウエル号が水漏れを起こし帰国することになり結局102人の清教徒と27人の船員を乗せた残りの1隻の「メイフラワー号」のみが向かう事になった。2ヶ月にも及ぶ航海であった為、塩づけにした以外の食べ物は腐り、他には乾燥したものぐらいしかなくビタミン不足による病気が蔓延し、結局ボロボロの状態で66日後の11月11日に当初の到着予定地のヴァージニア植民地ではなくケープコッドのプロビンスタウンに到達した。

しかし、ニューイングランド地方の寒さは住む家もなかった清教徒にとっては過酷そのもので毎日住む家を作ることに専念するが体力が続かず、到着時のメンバーの半数は冬を越せずに亡くなりました。当時、清教徒達は農耕も十分にできず困っている時に先住民のインディアンと出会い、彼等から魚の調理法や鹿や七面鳥の狩猟の仕方、肉の調理の仕方、また食べられる植物と薬になる薬草の見分け方等を教えてもらい生き永らえていく術（すべ）を学んでいきました。それ以降、収穫の秋を迎えると彼等はお世話になったインディアン達を招待し、3日間も収穫を祝うお祭りを行いました、これが現在でも続いているサンクス ギビング デイ (Thanks Giving Day)、11月の第4木曜日の感謝祭の始まりだと云われています。宗教、文化、遊戯（スポーツも含む）などは中国の蹴鞠と同様必ず物品の交易と一緒に伝達されるものです。日本の戦国時代でさえキリスト教の布教と共に鉄砲、軍艦、洋服、ワイン、時計、地球儀などがポルトガルから伝わってきました。もちろん中国からはもっと早く火薬や蹴鞠も仏教と共に伝来しました。当然、イングランドから「アソシエーション フットボール」や「ラグビー フットボール」もアメリカ大陸に伝わったと考えられます。

1820年といえばあのエリス少年がラグビー校でのフットボール ゲーム中に突然ボールを持って走り出した時の3年も前の事です。

その1820年にアメリカの先住民の間では「BALLOWN」と呼ばれていた「Kiccking Game」即ち「蹴球」がプリンストン大学で行われていた。北米大陸の東部地区の他の大学でも独自のルールで「Kiccking」を主とした球技を行っていた。もちろんボールを持って走る事はなく手を使うことはあったが、それは転がっているボールを止める時くらいであった。東部の名門大学間ではこのようなフットボールがその後ほぼ50年ほど続くが、1827年から「Bloody Monday」（血まみれの月曜日）という独自のフットボールを行っていたハーヴァード大が、1860年フットボールを突然辞める事を決めた、上級生からのいじめや乱暴な行為を減らしていこうという大学の方針によるものであった。



(写真・8) 1925年、オネイダ

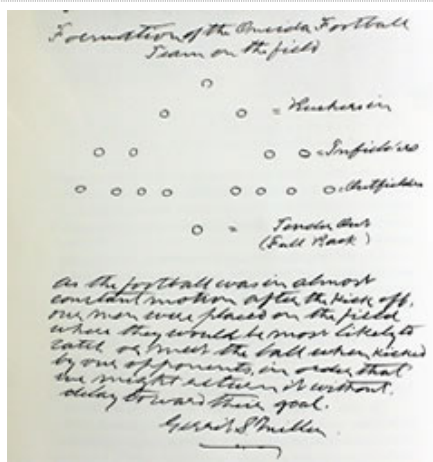
以来学生達はゲームにまじめな態度で取り組み、相手と当たる時もルールに基づいてハードであったがクリーンなヒットを心がけていった。また、1855年には店でゴム製のボールが販売されるようになり、1862年には先住民のオネイダ族がボストンで最初のフットボールクラブと云われている「オネイダフットボールクラブ」(写真・8)を創立した。このフットボールはサッカーとラグビーの良いところを取り入れミックスしたような形態のゲームでもあった。

(写真・8A・8B)

フットボールクラブ創設時のメンバーが記念モニュメントの前に集まった。



(写真・8A) 1863年 オネイダフットボールクラブに送られた勝利記念のラバーボール



(写真・8B) 1863年 オネイダフットボールチームの最初のフォーメーション図

これが、後に「ボストンゲーム」というフットボールになっていった。

この「ボストンゲーム」がボールを持って走る事が多いので、これがアメリカンフットボールの始まりだという人もいるがまだまだサッカーの要素の多いゲームであった。

そして、1869年11月6日午後3時にニュージャージーのニューブランズウィックでラトガーズ大学とプリンストン大学が初のフットボールの大学対抗試合を行った。(写真・9)(写真・9A)しかし、実際はその2年前の1867年にプリンストン大とプリンストン神学校との間で各25名づつの選手で予行演習のような練習試合が行われていた。



(写真・9) 1869年、11月6日 ラトガーズ大とプリンストン大による初めてのフットボール対抗試合



(写真・9A) ラトガーズ大の体育館に飾られている1869年11月6日に行われたプリンストン大との試合記念盾

さて、ラトガーズ大とプリンストン大の試合ですが使用されたボールは丸いボールで、ルールもイングランドで行われて

いたサッカーのルールであった。この試合を最初のアメリカン フットボールの試合と云う人が多く、現実にアメリカでは1969年にアメリカン フットボールの誕生100周年記念と銘打って試合やセレモニーを行っている。しかし、アメリカの大学での最初のフットボール（サッカー）の対抗戦であってアメリカン フットボールの対抗戦ではないと思われる。

この対抗戦は両チームとも3試合行うことで合意していた。

最初はラトガーズ大のルール（手で空中にあるボールをたたき落としてもよかった、選手の数には25名など）で行われ、風が強く寒い日であったにも拘わらず約100名の観客が詰めかけた。勝敗の取り決めは両キャプテンの合意の下で時間には関係なく先に6ゴールしたほうが勝ちということで決まりスタートした、ゲームは伯仲し同点、同点のシーソーゲームになったが4対4からラトガーズ大が続けて2ゴールし6対4で勝った。

これを見ていた識者は余りにも激しいゲームだったので、この試合のリターンマッチは中止したほうが良いという意見を提出したほどであった。



(写真・9B) 1806年 イェール大のキャンパスでフットボールを行っている様子が描かれた最初の絵

しかし、その1週間後の11月13日リターンマッチはプリンストン大のホームでプリンストンのルール（空中のボールを手でキャッチした後フリーキックが許されていた）で実施された。今度は両キャプテンの合意で8ゴール得点したほうが勝ちということで始められた。結局、プリンストンが地元の利という事と自分たちのルールに基づいて闘った事でリベンジを果たし8-0で圧勝した。この圧勝には訳があり、この時のラトガーズ大の選手は大きくはなかったがスピードがあり、プリンストン大の選手は背が高く大柄であったが動きは鈍かった。当時はユニフォームがなかったが観客は自ずとどちらの選手かすぐ判ったという。プリンストン大はホームゲームの際、背が高いという利点を自軍のルール即ち頭上でボールをキャッチできるということでより有利にし圧勝に導いた。その後コロンビア大、イェール大なども選手数を20名としてフットボールの試合をするようになった。（写真・9B）

そして、1873年10月20日、ニューヨークの五番街ホテルでイェール、コロンビア、プリンストン、ラトガーズの4大学で大学対抗戦ルール委員会を結成した。その後イェール大は「イートン プレーヤー」という「イートン フィールド ゲーム」から名付けられたイングランドのチームと対抗戦ルールで決められた出場選手数20人ではなく11人で闘って勝利した。1873年の冬にはルール委員会でサッカーが認められ、1876年11月にはラグビーが認められたがアメリカン フットボールへの道のりはまだまだ険しかった。



(写真・9C) 1874年5月 ハーヴァード大 対 カナダのマクギル大とのラグビー対抗戦

ボールを持って走ってもよいという「ポストン ゲーム」を行っていたハーヴァード大は4大学の作成したサッカーを基本としたルールには同意できないので、東部の大学とは試合ができなかったが、1874年5月14日イングランドのラグビールールでフットボールを行っていたカナダのマクギル大学と3試合行うことで合意した。（写真・9C）

最初の試合はサッカーボールを使ったハーヴァード大のルールで、次の2試合は楕円形のボールを使ったマクギル大のルールで実施することも決まった。結果、ハーヴァードの2勝1分けとなり、これがきっかけでハーヴァード大はラグビールールを取り入れることに決めた。（写真・9



D)

(写真・9D) 1874年10月23日 モントリオールで行われたハーヴァード大とマクギル大の試合



そして、1875年11月13日、古くからのライバルであるイエール大学とラグビールールで試合をすることになったがイエール大は0-4と完敗を喫してしまった。

(写真・9E・9F)

(写真・9E) 1875年11月13日に行われた最初のイエール大とハーヴァード大の対抗戦



(写真・9F) 1875年 ハーヴァード大の新生と上級生の練習試合

この試合を観戦していた2人のプリンストン大学の選手が、すぐ大学に戻りその試合の状況を説明し、こんな面白いゲームはないから是非我々もこのゲームに参加しようとの部員を説得した。1876年11月23日、マサチューセッツのスプリングフィールドにある「マサソイトハウス」にハーヴァード、イエール、プリンストン、コロンビア大が1874年にラグビールールをベースにして行われたハーヴァード大対マクギル大の試合を参考にした新しいルール作りの会議が行われた。これまでとの最大の違いはエンドゾーンへのタッチダウンはあくまでもゴールにキックする権利を得るためのものであったが、タッチダウン自体が得点として認められるようになり、後にラグビーもトライという呼び方で得点として認めるようになった。また、丸いゴムボールの代わりに楕円形の皮で覆われたボールを使用する事も決められた。この会議の後、ハーヴァード大、コロンビア大、プリンストン大の3校のみで大学対抗戦協会を結成することになった。だが、イエール大は協会の提案する15名という競技人数に同意できなかった為、メンバーから外れることになった。この時、会議の1週間前に後にフットボールの歴史を大きく変えることになる17才の新人がイエール大学でプレーしていた。



現在「アメリカンフットボールの父」と呼ばれるウォルター C. キャンプであった。(写真・10) キャンプが高校を卒業した時にイエール大はラグビールールを受け入れていた。



(写真・11)晩年のウォルター
キャンプ

しかも、1876年に4大学で行われたルール会議の席にまだ1年生だったキャンプがイエール大の代表として出席し、それ以降その会議には死を迎える1925年まで出席し続けた。(写真・11) キャンプは野球では誰よりも早くカーブボールを習得し、走ればニューヘブンで一番と云われるほど早く、学業のみならずスポーツも万能であった。

イエール大ではボート部でエイトを務め、フットボール部と野球部のキャプテンをも務めるというスーパースターでもあった。(写真・11A) キャンプはルール委員会で様々なアイデアを提案をするが全て拒否されてしまう、だが1チームの競技者数を15名から11名にするという提案はかたくなに主張し続けた、この時まで19才の青年であった。1880年になって11名という人数の取り決めが承認され、キャンプはスクリメージ ライン(LOS・攻撃選手と守備選手間の仮想ライン)とクォーターバック(QB)の提案をしこれも認められた。(写真・11B) 最初はボールを現在のラグビーのようにセンターが足でQBに押し出していたが、後にセンターからQBに手で後方に直接パスするようになった。(写真・12)



(写真・11A) 1879年
イエール大のメンバー。中央
でボールを持っているのが
ウォルターキャンプ



(写真・11B) 1880年
代のスクリメージ風景



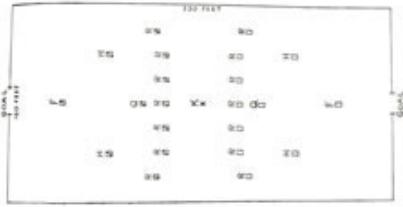
(写真・12) フライング
ウェッジ(V字) フォーメー
ション。中央でQBが手を出
しているのが見える

これらの斬新なルールが次々と決められていくと、プリンストン大は次に面倒な問題を起こし世間を騒がせた、しかしこのことがサッカー、ラグビーとハッキリと決別し、アメリカ人によるアメリカン フットボールが誕生することになるのである。

プリンストン大は自軍がボールを持つとキックを放棄し相手にボールを渡さないようにし、その事で引き分けに持ち込むことを実行した。この為ダラダラとスクラムを組むのを見せられるだけでいたずらに時間が過ぎるだけで攻撃が見られない試合に観衆は大いに不満を抱き、この事件は各新聞でもトップで扱われるなど大問題になった。(勝てないが絶対に負けない作戦)

そこで、1882年キャンプはボールの所有をハッキリさせる為に3回の攻撃で5ヤード進まなかった場合、ボールの所有権は自動的に相手に移るというアイデアを出し、後に3回の攻撃で10ヤードに変更されたが10ヤード前進するには攻撃の回数が少ないということで現在の4回の攻撃で10ヤードというように変更されていった。

これで、ボールの所有がいつどうなるか判らないサッカーやラグビーとの決定的な違いがより明確になった。これら以外にもフィールドの大きさなどをはじめとしキャンプは毎年のようにルールを変えていった。(写真・12 B) 1883年には得点の方法を何度も変更し、1887年には試合時間を前、後半45分ずつの90分にし、1888年には腰から下へのタックルを許可し(写真・12 A)、1889年には審判員にホイッスルとストップウォッチを持たせた。これらを顧みるとキャンプなしに現在のアメリカン フットボールは考えられないし、「アメリカン フットボールの父」と呼ばれていることもよく御理解いただけると思います。



(写真・12 B) 1880年代のフィールドの大きさとポジションを表した図



(写真・12 A) 1888年腰から下へのタックルの公認で負傷者が続出した



第17話 アメリカン フットボールの起源と歴史 第7章

さて、ラグビーやサッカーと決別したアメリカン フットボールですがウォルター キャンプの他にも後のアメリカン フットボールの繁栄に大きな影響を与えることになる指導者が現れてきます。1892年にハーヴァード大学の指導者としてローリン ディーランドが就任するが彼はチェスの名手としては有名であったが、フットボールの選手としての経験は全くなかった。そのローリンはイエール大との伝統の一戦で「リーハイ V」というV型体型の目新しい攻撃体型で、これまでも荒っぽい闘い方で知られていたハーヴァード大により一層強力な武器が加わることとなった。

だが、ハーヴァード大には強烈なライバル心を持っているイエール大の選手は見たこともないようなフォーメーションにも拘わらず果敢に挑みハーヴァード大を制した。

それでも、ディーランドによって作られた斬新なフォーメーションは後に「Flying Wedge」(フライング ウェッジ) (写真・12) と呼ばれるようになるがこのイエール大の闘い以降多くのコーチがこの戦法を取り入れ全米を席捲するほどセンセーショナルな戦法でもあった。(写真・12C) しかし、1893年のシーズンが終わった時、このフォーメーションによる負傷者が余りにも多く殆どの大学のチームがその対処に追われる始末であった。



(写真・12) フライング ウェッジ (V型) (写真・12C) 1891年 プリンストン大
フォーメーション。中央でQBが手を出して のフライングウェッジ
いるのが見える

しかも、1894年のハーヴァード大とイエール大の伝統の一戦は背後からのブロック(現在のクリッピングで反則となっている)など多発し、両チームとも骨折者のみならず血まみれになるほどの凄惨な試合になり「ハンプトン球場の血の浴槽」と云われるほどであった。

その結果、この名門同士の対抗戦は1897年まで中止されることになり、この影響でやはりアーミー(陸軍士官学校)対ネイヴィ(海軍士官学校)の伝統の対抗戦も1894年から1898年まで中止になった。そして、1905年、アメリカン フットボールの試合で遂に18人の死者と159人の重傷者を出しメディアでも話題になりフットボール廃止論が国会に提議されるほどになった。



(写真・13-A) 1903年負傷

を防ぐためヘルメットを着用する選手が増えた

時の大統領セオドア ルーズヴェルトは安全にプレーできるような斬新な改革がない限りアメリカン フットボールは禁止しなければならないと関係者に告げた。ルーズヴェルト大統領はホワイトハウスにイエール、ハーヴァード、プリンストン各大学のOB達を招集し善後策を検討し、同時に用具メーカーに安全な装具の開発も示唆した。(13-A)



(写真・13) 1879年プリンストン大 対 イエール大とのラグビー形式の試合、中央部のプレーだが誰がボールを持っているのかわからないほどである。

1905年12月28日、ニューヨークに62校の代表委員が集まり、安全策等について論議し、その結果「Intercollegiate Athletic Association of US」、後の「National Collegiate Athletic Association」(NCAA-全米大学体育協会)が結成され、1906年1月12日、現在のNCAA ルール委員会の原点となる歴史的な会議がイエール大のウォルター キャンプ、ハーヴァード大のウィリアム リード、アーミーのプラマー ピアース達によって開かれた。それは、中央部への集団の中に突進していくプレー(写真・13)が多いために負傷が多いということから、プレーをもっとワイドオープンにし相手とぶつかることを減らせば負傷者も減るのではという発想から前方へのパスが有効になったが、それまではラグビー同様横か後方へのパスは認められていたが前パス(フォワード パス)は認可されていなかった。



(写真・13B) 1887年 イエール大とプリンストン大の試合でラインアップする選手

そして、「ニュートラル ゾーン」(ボールの両先端の間隔でゴールラインに平行に引かれた架空のライン間にできたゾーン)の設定、スクリメージライン上には6人以上の選手が位置すること、ファーストダウン(新しい攻撃権)獲得まで3回の攻撃で5ヤードの前進を10ヤードに変更など画期的なルールができあがった。(写真・13B)

ここでラグビーと異なる違いができ、真のアメリカン フットボールの確立への大きな一歩を踏み出したと云ってもよいでしょう。それでも3年後の1909年には競技人口が増えたとはいえ、まだフットボールでの死者は33人、重傷者は243人と増えるばかりであった。その為、1910年に更にルールが改革されフィールドゴールによる得点を4点から3点に下げ、危険なフライング タックルの禁止、スクリメージライン上の選手数を6人から7人以上と変更し、その2年後にはフィールドの大きさが現在と同じ大きさになりエンド ゾーンでのパス キャッチが認められ、3回の攻撃権から4回に変更された。

これは各校の指導者にとっても大きな改革でもあった。最初に斬新な提案をし最初の改革を実施した「アメリカン フットボールの父」と呼ばれているウォルター キャンプもまだ46才の若さであった。その後1900年代に入っても、

キャンプの後を継ぐ優秀な指導者が次々に現れた。



アメリカン フットボールの起源と歴史



第18話 アメリカン フットボールの起源と歴史 第8章

イエール大学でウォルター キャンプの元でプレーをしながら牧師になるための勉強をしていたエイモス アロンゾ スタッグ (Amos Alonzo Stagg) は、自分自身が余りスピーチが上手くないということに気付きスポーツの指導者を目指すことに心変わりしていった。



(写真・14) 1888年 イエール大がチャンピオンになった時のメンバー (2列目左端がアロンゾ スタッグ)

彼がイエール大に入学した1885年にフットボールを始め (写真・14)、後にコーチとなり1953年91才の時に引退するまでフットボールに拘わり続けたが、彼の人生はまさしくアメリカン フットボールの発展史そのものであった。

イエール大に入学しアメリカン フットボールを始めたスタッグだが、ウォルター キャンプによって改革されたとはいえまだラグビーの部分を残している時に参加した最初のスクリメイジ (スクラムが語源でSCRUMMAGEからSCRIMMAGEになった) に始まり、「T-フォーメーション」や「I-フォーメーション」を体験しただけではなく彼自身がその発展史上に大いに拘わっていた。

FOOTBALL by Rovert Leckie

キャンプを「アメリカンフットボールの父」と称するならスタッグは新しい戦術はもちろん練習器具などでも多くの新しいものを創り出した「アメリカンフットボールにおける改革者もしくは発明家」と云ってもいいだろう。また、フットボール以外でも活躍の場は多く、バスケットボールを創案したと云われているスプリングフィールドの医者であったネイスミス氏の手助けもし、1906年から1932年までオリンピック委員も務め、陸上の100m競争で世界で初めて10秒をきったクライド ブレアーのコーチも務め、自身がイエール大の野球部でピッチャーの時、相手チームから20三振を奪う豪腕も発揮するほどオールマイティであった。



(写真・15) シカゴ大のヘッドコーチとして選手に指示するスタッグ

そして、日本に初めて野球のアメリカ オールスターチームを連れてツアーしたのもスタッグであった。スタッグは1892年にシカゴ大学のコーチに就任するが、これがアメリカン フットボールでの最初の有給のプロコーチだと云われている。(写真・15)

スタッグの指導方針は試合に勝つことも大事だが、もっと大事な事は潔癖な精神を持つ事であると指導し最後までこのことを信じて疑うことなく貫き通した。スタッグ自身も小柄ながらオールアメリカンに選ばれるほどの名選手であったが、シカゴ大学のコーチになっても小柄な選手を好んで抜擢し起用することが多かった。

FOOTBALL by Rovert Leckie

1896年シカゴ大学は体重僅か72kgと小柄のハーフバック クラレンス ハーシュバーガー (写真・15A) の大活躍により当時破竹の勢いだったミシガン大学に7-6で勝つという大番狂わせを演じ



(写真・15A) シカゴ大 ハーフ
バックのハーシュバーガー
by College Football USA

た。この当時のミシガン大は東部地区で始まり普及したフットボールを西地区では始めてフットボールを始めた大学でアツという間に全米に知られる強豪チームになっていた。



(写真・16) 1902年最初の
ローズ ボウルで圧勝したミシガン
大のヨースト コーチと選手
FOOTBALL by Roberv Leckie

1902年には最初のローズボウルでスタンフォード大と対戦し、攻撃陣は1, 463ヤードも獲得し、49-0と圧勝した。(写真・16) 現在で例えると1試合で500ヤード以上も獲得されると話にならないほどの一方的な内容で野球なら10-0ぐらいの試合で敗れるようなもので、ファンからすれば観る気もしないひどいゲームであった。

その後もミシガン大は無敗のシーズンを7度も行い、特に1901年から1905年までの5シーズンでの得点は42チームと対戦し2, 819点もあげ、この時のチームを「1分間で1得点する」という意味で「A Point a Minute」チームと言われていた。当然、シカゴ大などの敵ではなかったはずである。その強敵に1点差とはいえシカゴ大はハイパワーオフェンスを誇るミシガン大に勝利したのである。

その翌年、シカゴ大はBig 10 (ビッグ テン) カンファレンスのタイトルをかけてウィスコンシン大学と対戦することになったが、前日エース ランニングバックだったハーシュバーガーは体重を少しでも増やしたいと思いタマゴを13個も食べ、結局翌日の試合には激しい腹痛に見舞われ試合には出場できなくなり23-8と敗れてしまった。試合後、スタッグは「我々は11人の相手に負けたのではなく、13個のタマゴにやられた」とジョークとも思える話で会見を終えた。そして、1899年スタッグ率いるシカゴ大学はBig 10カンファレンスのチャンピオンに初めて就いたのである。



(写真・17) 91才までコーチを
続けたアロンゾ スタッグ
by College Football USA

1965年8月16日、アメリカンフットボール、バスケットボール、野球、陸上それぞれの競技のコーチを務め全てをトップクラスのレベルに押し上げたエイモス アロンゾ スタッグは人生の全てをスポーツに捧げカリフォルニア州ストックトンで102才の生涯を静かに閉じた。(写真・17)

このスタッグを評して、ノートルダム大というよりアメリカのカレッジ フットボール界を代表する名コーチのニュート ロックニーにフットボールの全てはスタッグの人生の中にあると言わしめるほどであった。さて、ニュート ロックニーについての詳細は後に述べることにし、スタッグの次に現れた革新的なコーチの代表と言っても過言ではないグレン ポップ ワーナーについてお話ししましょう。

ポップ ワーナーは(写真・18) 1895年コーネル大学の法学部を卒業後、ジョージア、コーネル、ピッツバーグ、スタンフォード、テンプルなど多くの大学のアメリカン フットボールチームを指導するが、中でも最もエキサイティングで伝説的なチームと云えば「カーライル インディアン 工業学校」での出来事であろう。この学校には現在でもアメリカでの史上最高のアスリートと言われていたジム ソープというベスト アスリートがいた。(写真・19) (最近アメリカで史上最高のベストアスリートを選考する投票が行われ、2位のあの誰もが知るホームラン王のベーブ ルースに大差をつけてジム ソープが1位に選ばれた) ソープはインディアンとアイルランド系アメリカ人のハーフであった父とインディアンとフランス系アメリカ人の母との間にオクラホマのインディアン居留地でサック&フォックス族の双子の弟として1888年5月28日に生まれたとされているが、居留地では出生証明が見つ

かっていないので確かな事は判っていない。ただ、部族員としての名前は「ワ・サ・ハク」(輝ける星)と名付けられるで将来を暗示するようであった。



(写真・18) グレン スコビィ "ポップ" ワーナー
FOOTBALL by Robert Leckie



(写真・19) カーライル インディアン 工業学校時代からオールマイティだったジム ソープ
FOOTBALL by Robert Leckie

ソープはフットボール選手としては走ってよし、投げてよし、蹴ってよし、当たってよしという全てが揃った選手であったが野球でも打って、投げて、守って、走ってよしの三拍子も四拍子も揃い(写真・19A)、1912年ストックホルム オリンピックでは五種、十種の両競技で金メダルを獲得するというスーパーマンぶりであった。(写真・19B)しかし、このメダルは後にソープがお金が必要な為に少しい期間だがサザン ベースボール リーグというセミプロリーグで野球をし報酬を得たという事が発覚し、アメリカのアマチュア体育連盟からアマチュアとしての規定に違反するという事で金メダルを返還するよう命じられた。



(写真・19A) メジャーリーガーとしても活躍したジム ソープ



(写真・19B) ストックホルム オリンピックで2個の金メダルを獲得したジム ソープ

当時はプリンストン大やハーヴァード大のアイヴィーリーグの学生さえ夏のセミプロのチームの一員として出場しソープよりもっと多い収入を得ていたが偽名を使っていたので判らなかつただけだとか、ホテルの運営するセミプロの野球チームに参加して報酬を得ているのにソープにだけアマチュアリズムを楯に、このメダル返還命令はおかしいというような論議が世間を賑わした。

皮肉な事にソープと一緒に代表チームの一員として活躍したメンバーに後のI O C (国際オリンピック委員会) 会長に

なったアベリー ブランテージがいたが、彼は元チームメイトのソープに一切同情することなく、ソープが「無学だったので騙そうなんて悪気はなく本当に何も知らなかった」と言ったことに対し「無知は言い訳にならない」とキッパリと返還運動をはねつけ応じなかった。



(写真・20) プロチームのキャント
ンブルドックスの3人のスター選
手 中央がジム ソープ

結局、ソープの死後30年経った1983年1月18日にI O Cから記念メダルを二人の息子に返還されることになった。ソープが実際にストックホルムで受賞した金メダルは博物館に保管されていたが盗まれいまだに発見されていない。繰り上げで銀から金メダルになった選手の金メダルはそのまま本人に渡されたままである。ソープはその後プロ野球、プロ バスケットなどでも活躍するがソープ自身はアメリカン フットボールが一番好きだったというように、1915年にプロ フットボールチームのキャントンブルドックスと1試合250ドル（現在の55万円くらいに当たる）という当時としては破格の金額で契約し世間を驚かせた。（写真・20）それまで、1試合平均観客数が1,200人だったのが一気に7倍近くの8,000人を越すようになるほどであった。

FOOTBALL by Rovert Leckie

1920年、12チームでプロフットボールリーグの「A P F A」（アメリカン プロフェッショナル フットボール アソシエーション）が結成され、その2年後に「N F L」（ナショナル フットボールリーグ）と改称されるがソープは初代のリーグ会長に就任したがキャントンでプレーヤーとして専念し、1年後にはジョセフ カーが代表に就任した。また、キャントンではヘッドコーチも続けながら1932年41才の時まで現役の選手としてもプレーを続けた。

現役を引退した後の人生は決して恵まれたものではなく、生きることで精一杯のような毎日で人生の後半はアルコール中毒で入退院を繰り返す日々で、1953年の初冬にカリフォルニア州のロミータの自宅で妻と食事中に心臓発作を起こし、人工呼吸で一命を取り留めたものの結局意識は戻らず、3月28日に死去した。



アメリカン フットボールの起源と歴史



第19話 アメリカン フットボールの起源と歴史 第9章

ともあれ、この大スターのジム ソープを擁してポップ ワーナーは「カーライル インディアン工業学校」を地方の田舎校から一躍全国区にのしあげ「全米NO. 1」の地位まで上り詰めるほどの勢いであった。それはワーナーの生涯勝利数がエイモス アロンソ スタッグの3 1 4勝に僅か1勝少ない3 1 3勝であることを思えばいかに凄いコーチであったかが判る。

ポップ ワーナーは1 8 9 9年から1 9 0 3年までカーライル工業学校を指導するが、その後母校のコーネル大で法学部の助手をしながらコーチをしていたが当時の学生がまだ若いワーナーの背中に「POP」と書いたタグを貼り付けたのがニックネームのポップの由来であるが、1 9 0 7年に再びカーライル工業学校を指導することになった。

ポップ ワーナーは試合に勝つためにはルールで許される範囲内でありとあらゆるフォーメーション、プレー、戦略などを考案し実践した。ダブルウイング、シングルウイング フォーメーションを駆使したパイオニアでもあり、今ではどこのチームのプレーブックにあるリバース プレーなどもポップ ワーナーが最初だったと云われている。このシングルウイングからのプレーを研究し当時無名だったノートルダム大学をチャンピオンに導いたのが伝説のコーチ ニュートロックニーであった。

ロックニーはその為にニューヨークまで歴史的な試合と云われているワーナー率いるスタンフォード対強豪アーミー（陸軍士官学校）の試合を観に行ったほどである。しかし、当時はまだフットボールの夜明けの時代で誰かが何か新しいことを始めると、それが全て歴史上最初に実施されたということになりがちで、当時のコーチは自分が最初にやったという人が何人もいてレコードブック等で残っているものだけが最初の実行者として残されている事が多いが、実際はどこかで無名のチームの無名のコーチが先に実践していたかも知れません。

いずれにせよ、ポップ ワーナーは改革者でもありアイデアマンであった事には間違いなく、例えばジャージイにボールの絵を描いて誰が本当のボールキャリアか判らないようにしたり、ジャージイの中にボールを隠して一人だけ逆方向に走らせて得点をあげたり、今では信じられない数多くのトリック プレーの発案者でもあった。また子供が大好きでどこに遠征に行っても時間があればいつも子供達を集めて指導をしていた。現在アメリカの少年フットボール リーグで最大の組織を誇るユース リーグは子供好きのポップ ワーナーの名をとり「ポップ ワーナー リーグ」と呼ばれ、毎年1 2月にフロリダ州のオーランドでポップ ワーナーの名を冠した少年達による「全米選手権試合」が行われている。

そのポップ ワーナーも1 9 5 4年8 3才で生涯を終えるがその3年前に記者投票で「Coach of the Year」（全米年間最優秀コーチ）に選ばれ有終の美を飾った。

前述したように史上初の有給コーチは1892年にシカゴ大学のヘッドコーチに就任したエイモス アロンゾ スタッグだと云われているが、以降1900年代に入って有給コーチを採用する大学が増えていった。当時、まだフットボール界では無名だったオーバン大も優秀なヘッドコーチを採用した。現在も大学のフットボール界の最も優秀な選手に贈られる賞にその名を冠せられているジョン ウィリアム ハイズマンで(写真・21)、このハイズマン賞(写真・21A)は選手にとっては最も名誉な賞であり、シーズン終盤には誰がその荣誉に輝くのか毎年話題になるほどである。



(写真・21)メガフォンとハンチングがトレードマークだったコーチのハイズマン



(写真・21A) 最優秀選手に贈られるハイズマン トロフィー

FOOTBALL by Robert Leckie

ハイズマンはオハイオ州オーバーリン校で勝ち続けておりプロの中のプロと云われていた。1892年から1927年までオーバーリン、バクテル(現在のアクロン)、オーバーン、クレムソン、ジョージア工科、ペンシルバニア、ワシントン、ジェファソン、ライスの各大学のコーチとして活躍した。

1927年から亡くなる1936年までニューヨークのダウタウン アスレティック クラブの体育局長を務めていた。

現在でもハイズマン トロフィーの授賞式はこのクラブで行われているが、第1回は1935年でDAC トロフィーという名前で表彰式が行われていたが、翌年の1936年にハイズマンが亡くなり第2回からその名をとってハイズマン トロフィーとなり現在に至っている。

ハイズマンは当時では珍しく二つの大学に行ったフットボール選手で、中でも最も活躍した選手のひとりであったと云われている。

1887年から1889年まではブラウン大でタックルのポジション、1890年から1891年までペンシルバニア大でエンドとしてプレーし活躍した。

彼は元々弁護士の資格を有し弁護士を目指していたが、フットボールに夢中になりコーチの道を歩むことになった。

ハイズマンは何事に於いても完璧主義者であったが、優秀さや独創性はもちろんフットボール界への貢献度などいずれの点でもウォルター キャンプ、アロンゾ スタッグ、ポップ ワーナー等の各コーチと並び称せられるほどのコーチであった事には間違いない。

彼は1895年ポップ ワーナー率いるジョージア大とノースカロライナ大との対戦を観てフォワード パスの有効性を学んだ。

観戦後、ハイズマンは「フォワード パスはケガを少なくできるだけでなく、プレーを大きくダイナミックに展開することができる」と後に語った。

しかし、そのハイズマンも1906年まではまだ上手くパスを使いこなすことができなかった。だが、チームに戻ると連

日そのフォワード パスの猛訓練を始め、最終的には当時最も有効且つ上手くフォワード パスを使いこなしたコーチとしても名を馳せることになった。

また、ジャージの下にボールを隠すトリックプレーはポップ ワーナーが最初に使ったとされているが、実際は1895年ハイズマンがオーバーン大のコーチをしている時に先に使っていたという説もあり、T-フォーメーションも1894年にハイズマンが既に使用していたとも云われている。

このT-フォーメーションを使って1889年から1899年の間、東部地区で旋風を巻き起こしていたのがプリンストン大であった。



当時のプリンストン大のフットボール部には詩人として有名だったエドガー アラン ポー家の甥っ子達で6人の兄弟 (Poe Brothers) (写真・22) がプレーしていた。ちなみに日本の有名な推理作家の江戸川 乱歩はこの詩人のエドガー アラン ポーからヒントを得て名を拝借したと云われているが本当のことは会って聞いた訳でもないので不明です。

(写真・22) プリンストン大の6人

のポー兄弟、後列左端の口髭の選手

がエドガー アラン ポー

FOTTBALL by Rovert Leckei



1920年代はアメリカのスポーツ界にとってはまさしく黄金期であり多くのヒーローが誕生した。プロ野球のベーブ ルース、ゴルフのボビー ジョーンズ、テニスではビル ティルデンとヘレン ミルズ、ボクシングではジャック デンプシー、水泳ではジョニー ワイズミュラー (後に映画のターザン役で活躍した)、そしてフットボールでは伝説のコーチ ニュート ケネス ロックニイ (Knute Kenneth Rockne)、彼等の名はアメリカのみならず世界中で現在でも語り継がれている。

(写真・23)

しかし、ロックニイはフットボール自体がワールドワイドなスポーツでないため、世界的に知られることは他のヒーロー達と比べると比較的少ないかも知れないが、逆にロックニイの名はアメリカでは数々の伝説を残しアメリカ人の心に一番残っているヒーローと云っても過言ではないでしょう。

(写真・23) 伝説のコーチ ニュー

ト ロックニイ

FOTTBALL by Rovert Leckei



アメリカン フットボールの起源と歴史



第20話 アメリカン フットボールの起源と歴史 第10章

ロックニィは5才の時ノルウェーから両親と共に移民としてシカゴにやってきた。

近くに住む子供達から初めてフットボールを教えてもらい病みつきになっていった。

そして、地元の「ローガン スクエア タイガース」というクラブチームでランニングバックとしてプレーするまでに
なった。

シカゴの高校に行ってもフットボールをやり、やはりランニングバックとして活躍していた。高校卒業後は大学への入学
資金を作るためシカゴの郵便局の郵便配達員として働き、1,000ドル貯金し念願のノートルダム大に入学することが
できた。

1913年の夏、ロックニィはオハイオ州のシーダーポイントの浜辺でチームメイトのガス ドレイスと当時まだパス攻
撃が未熟だった時に毎日二人でフォワード パスの練習をした。その秋のシーズン、ノートルダム大より圧倒的に強く予
想でも大差をつけて勝つだろうと云われていたアーミー（陸軍士官学校）と対戦することになったが、予想に反してドレ
イスとロックニィのコンビによるパス攻撃が冴え渡り35-13という予想外のスコアで勝ち大番狂わせを演じ世間を
驚かせた。（この話は「長い灰色の線」というタイトルで映画化され大ヒットした）そして、1914年26才でノート
ルダム大の薬学部を卒業し、化学薬品会社に勤務しながら母校のコーチを手伝ったりしていた。

しかし、フットボールが大好きだったロックニィは大学から正式なコーチとしての就任要請がくるとあっさり会社を辞め
た。そして、エイモス アロンゾ スタッグ率いるシカゴ大のQB（クォーターバック）を務め、スタッグの秘蔵っ子で
もあったジェシー ハーパーによってかなりのチームに仕上げられていたノートルダム大のレベルをより高める為に19
18年からコーチを任せられる事になった。

ロックニィは後に「ノートルダム シフトとかモーション、フォワード パス等を自分が最初に使用したとか言う人がい
るが、キャンプやスタッグ、ポップ ワーナー、ハイズマン達の名コーチのコピーをしただけで私は少しも偉くない、
フットボールの発展はキャンプ、スタッグが育ったイエール大学と過去の偉大なコーチ達を称賛するべきだ」と話した事
があった。実際、スタッグの影響は随分と受けたようであった。

インディアナ州シカゴ郊外のサウスベンドにある無名のノートルダム大をあっという間に全米で知らない者はいないと云
われるほどの有名校におしあげたニュート ロックニィはコーチ就任僅か13年間で105勝12敗5分、5度の全米
チャンピオンに輝くなど素晴らしい成績を残した。

このノートルダム大には日本のフットボール選手や関係者でも憧れの念を抱き、フットボールの聖地のような感覚の人々
も多いと思われます。

そんなロックニイにも過信から大失敗を犯したことがあり、生涯この過信を選手にはもちろんのこと自からも戒めた。無名で決して強くなかったカーネギー工科大との試合を若いアシスタント コーチに任せ、自身は次の週に対戦する宿敵のアーミを偵察する為、一人だけでアーミー対ネイビーの試合を観戦しにいった。

試合終了後、ロックニイは目を疑うような電報を受け取った。

ノートルダム大がカーネギー工科大に19-0で敗れたという内容だった。スコアの書き間違いだと思い確認したが本当であった。

この年、全米チャンピオンの座は間違いないと云われていたことも全て不意になった。

以来、ロックニイはどんな相手に対しても油断と過信はしないようになったと自ら語っている。

そのロックニイも1931年3月31日に「ノートルダム魂」という映画作りに参画し、カンサスシティにいる二人の息子に会うために立ち寄って帰路に就くため離陸した直後搭乗機のTWA 599便は突然主翼が外れ小麦畑に墜落し、アツという間にまだ43才という若き生涯を閉じた。



(写真・24) 選手にスピーチする

ロックニイ

FOOTBALL by Robert Leckei

ニュート ロックニイは歴史に残る名コーチだったが、優秀な営業マンというより優秀な広報マンでもあった。

彼は時の大統領よりもスピーチが上手いと云われる程話が上手であった。(写真・24)

ハーフタイムのロッカールームでロックニイが選手に話し始め、その話しを聞いて後半戦の為にロッカールームを出ていく選手の殆どは感動して涙していたという。

前半に接戦で負けているような時にロックニイが選手を励ます為に好んでした話がある。

今でもノートルダム大に伝説として残る若者の話である。



(写真・25) ノートルダム大

ジョージ ギップ

FOOTBALL by Robert Leckei

1917年の秋に凄いバンターがいるという噂を聞いたロックニイが大学のキャンパスをぶらぶら歩いているとフィールドの方からボールを蹴る音が聞こえてきた。

そしてフィールドに行くと60ヤードのバントを蹴っている若者が一人で黙々と練習していた。

身長は183cmとまずまずだったが、やせているように見えた。それが、ジョージ ギップとの最初の出会いだった。(写真・25)

足下を見たらフットボール シューズではなくカジュアルなタウン シューズだった。

ロックニイは見慣れない学生に「どうして新入生のグループに入って練習していないのか」と聞いたら「フットボールは私には関係ありません、野球とバスケットボールの奨学金でこの大学に来たんですから」、「怖いからか」とロックニイが再び問い返すと、「怖いですって、自分には怖いなんて全くありません」、「それなら1時間以内に本物のフットボール シューズを持って来るから、少し待ってるように」と云ってロックニイは大急ぎでクラブハウスに行きシューズを持って帰ってきたが、ギップのサイズを知らないのにピッタリだったという。ギップはその日の午後にはフットボール部の練習に参加していた。

コーチのジェシー ハーパーとロックニイはギップの運動選手としての素晴らしい天性とも云うべき才能に驚かされた。だが、入部したその年は骨折し殆どプレーすることもなく短いシーズンを終えた。

翌年、ロックニイが初めて正式にヘッドコーチになった時、ギップは学校を辞めてしまった。ところが、1919年にま

た学校に戻ってきた。

ここからギップの様々な伝説が始まることになる。

1919年、アーミーとの伝統の一戦は前半を9-0とノートルダム大はリードされていた、審判は前半終了の合図をしようとホイッスルを持ち直し、まさにそのホイッスルを吹くために口元に持っていこうとしたのを見たギップはすぐに「俺に早くボールを渡せ」と言い、それを聞いたセンターはすぐギップにボールをスナップした。ギップはあっという間にゴールラインを飛び越え、その後も得点を重ね12-9で逆転勝ちを収め、ヘッドコーチ就任2年目のロックニィに無敗のシーズンと全米チャンピオンのタイトルをプレゼントした。

その翌年も無敗でシーズンを終えロックニィは2年連続2度目のナショナルチャンピオンの座に就いた。

ジョージギップの名は全米に知れ渡るようになり、あの天才アスリートのジムソープと比較されるほどになっていた。ソープと比較されるだけでも名誉なことであったが、ギップのほうがパスとキックは上手いのではと云われるほどになっていた。

実際にそれを証明してみせたのが1920年のアーミー（陸軍士官学校）との試合での事であった。

試合前のエキジビションで現在の野球のホームラン競争のようなもので、「フィールドゴールコンテスト」がありアーミーからはレッドリーダー、ノートルダム大からはジョージギップが競うことになった。

ボールは20ヤード、30ヤード、40ヤードと段々距離を長くしていくのだが、リーダーは40ヤードでギブアップした。だがギップはボールを50ヤードライン上に4個置き全てドロップキックでゴールポストの中央に蹴り込んだ。

結局、この試合でもパスで2TDをあげ、ランプレーで124ヤード走り一人で合計332ヤードも獲得し、27-17でアーミーを下した。

ギップの活躍が更に凄かったのが翌週のインディアナ大との試合だった。

ギップは試合中に肩が外れ鎖骨を骨折しサイドラインに運ばれたが、特に治療もせずただ包帯を巻くだけでベンチに座っていた。

ギップはそれでも自軍の不利な戦況を見て、ロックニィに出場したいと強固に訴えたがロックニィはベンチにギップを押し戻した。試合は最終の第4Q（クォーター）に入り10-0とインディアナ大にリードされていた。ノートルダム大も必死の反撃を試み、相手ゴール前30cmまでボールを進めた。



(写真・25A) パントをする

ジョージギップ

そこで、ロックニィは遂にギップをフィールドに送り込んだ。1発でエンドゾーンに飛び込み、PAT（ポイントアフタータッチダウン・・・後にTFPとなる）のキックも決めた。（写真・25A）残り時間が少ない為、ギップはそのままプレーを続け、肩を負傷しているためサイドスローでボールを投げインディアナ陣15ヤードまでボールを進めた。そして、ドロップキックを試みたがボールが高くそのままゴールに向かって走っているエディアンダーソンに両手でボールを放り投げこれを見事に補球しゴール前1ヤードまで前進した。

インディアナ大の守備陣は全員次のプレーのボールキャリアをギップ一人に絞った。ギップは相手の予測を読んで自分がボールを持つふりををして僚友のジョーブランディにボールを持たせ大逆転劇を演じた。



アメリカン フットボールの起源と歴史



第21話 アメリカン フットボールの起源と歴史 第11章

その1週間後、ジョージ ギップは前週の無理がたたったのか悪性の風邪を引いて寝込んでいた為、ノースウエスタン大戦はベンチで休養し出場しないことにしていた。

ところが観衆は「ギップを出せ、ギップを出せ」と大声で叫び続け収まる様子はなかった。

ロックニィは仕方なくベンチのギップに聞くと、すぐフィールドに飛び出し2回パスを投げたが2回とも失敗し、見かねたロックニィは慌ててギップをベンチに戻した。

その後ギップは2度とプレーすることはなかった。

風邪から扁桃腺炎が悪化し、ウイルス性感染症から肺炎を併発し、喉頭炎にもかかっていた。当時はウイルス性疾患に効果のある薬などなく死を待つだけであった。

ロックニィはベッドサイドで華麗だった弱冠23才の短い人生が霞のようにぼやけて消えていくのをぼんやりとうつろな目でただ黙って見ているしかなかった。

ギップは天国に召される直前に殆ど聞こえないようなかすれ声で「コーチ、もしこの偉大なノートルダム大が苦しい試合をするような時があったら、是非私の話を選手達に聞かせ、ギップが天国から応援しているから頑張れと伝えて下さい」とロックニィの手を握ったまま天国に旅立った。



(写真・26) フォーホースメンと
名付けられたノートルダム大の4人
のボックス陣

1924年ニューヨークで行われたアーミーとの試合でロックニィは全米を驚かせるようなことを披露した。

QB (クォーターバック、HB (ハーフバック)、FB (フルバック) のボックス陣4人 (HBは2人) にそれぞれヘルメット、ショルダーパッドなど装着させ試合に登場するユニフォーム姿のまま馬に乗せ1人づつにボールを持たせ、その4人に「フォー ホースメン」と名付けて新聞記者に写真を撮らせた。

(写真・26) この試合に12-7で勝ったノートルダム大の闘い振りを報道するのに翌日の全紙はこの写真をトップで「フォー ホースメン疾走する」と掲載した。

FOOTBALL by Robert Leckei

二人のハーフバックのうちドン ミラーは体重約73kg、ジミー クロウリーは74kg、フルバックのエルマー ライデンはミラーと同じ73kg、クォーターバックのハリー スタウルドレーは70kgと軽量であった。

以前述べたようにロックニィはベップ トークと宣伝のうまさには大統領も教を請うほどトップクラスであったと云われている。

この1924年のシーズンは10勝無敗と完璧なシーズンであり、これまでと違って初めて満場一致の全米チャンピオンに輝いた。

カレッジ フットボールも人気が出てきたのは事実だがこの当時はまだイギリス出身の記者はサッカーをトップに、ニュージーランド出身の記者はラグビーをトップにするような時代だった為、ロックニィは何とかトップニュースになるような見出しを考えていた。

結果として全米の記者はロックニィの意図にはまってしまいカレッジ フットボールは全米の注目を浴びるようになっていった。

現にこの1924年は断トツの1位で全米チャンピオンになったが、ノートルダム大にはいつものような大スターも不在で、4人のバックス陣も一人一人の記録や活躍を見ても目を見張るようなものはなく、結局それらをグループにし「フォー ホースメン」として売り出した宣伝の旨さによるところが大きかったと後に記者達は語っている。だが、同じ時期の1924年にアメリカン フットボールを真のNo. 1スポーツに押し上げた本当の大スターが登場した。

「フォー ホースメン」が紙上を賑わしている時に、アーミー対ノートルダム大の試合が行われていたニューヨークのポロ グランドから1, 200 kmも離れたイリノイ州のシャンペインにあるイリノイ大の新設のスタジアムに強豪ミシガン大を迎えフットボールの試合が1924年10月に行われていた。だが最初の12分で勝負は決まった。



イリノイ大のハーフバック、レッド グレンジ (写真・27) が第1Qの12分で一人で4タッチダウンをあげた、しかもボールを持った回数は4回即ち一度持ったら全てゴールまで走ったということであるが、その距離は93ヤード、67ヤード、56ヤード、44ヤードの距離であった。ちなみに当時のヘッドコーチで後の指導者に大きな影響を与えたボブ ザップキィはグレンジには20分与えるだけで充分だと言った。現にこの試合も4TD後、後半開始まで出場せず後半すぐに再び5ツ目のTDをあげ最後は走るだけではなく18ヤードのTDパスを投げて試合を終わった。グレンジは大学で3,647ヤード走りこの大記録は当時では永遠の記録と思わせるほどの大記録であった。

(写真・27) アメリカン フットボールをアメリカのNo. 1スポーツにしたスーパースター、レッド グレンジ

FOOTBALL by Robert Leckei

1925年グレンジはプロ フットボールのシカゴ ベアーズに入団することになるが最初のデビュー戦のカージナルス戦の入場者は36,000人とスタジアムが溢れるほどであった。1週間後にニューヨークに遠征しジャイアンツとポロ グランドで試合したがこの時は68,000人の大観衆が「ギャロッピング ゴースト」(タックルしてもスルスルとすり抜けてしまうので疾走する幽霊と名付けられたレッド グレンジのニックネーム)をひと目見ようと詰めかけた。

とにかくレッド グレンジのプロ入りがきっかけでそれまでカレッジ フットボールの後塵を拝していたプロ フットボールも多くのファンを呼び、同時にアメリカン フットボールをアメリカ人の最も愛するスポーツ、大観衆が熱狂できるスポーツとして文字通りNo. 1スポーツにしたのである。



アメリカンフットボールの歴史と大統領の関わり



第22話 アメリカンフットボールの歴史と大統領の関わり 第1章

アメリカン フットボールの発展史や歴史を語る中で、大統領の関与で大きく歴史の流れが変わったり、大統領自身がチームの中心選手として活躍したり熱狂的なファンであったりすることも多く、そのエピソードには事欠かない。

歴代大統領とフットボールの関わりと言っても、アメリカ人の男性であればアメリカン フットボールを見ただけで寒気がするという人を探すほうが難しいほどで、それは大統領とて同じで、例えば本人自身がプレーしていようとまいと最頂のプロ チームやカレッジのチームがあるのは普通でしょう。

アメリカに於けるアメリカン フットボール（以降フットボールと記す）はもはやスポーツを超越し立派な文化と云えるでしょう。

ここに挙げる大統領達はフットボールの愛好家であるだけではなく、フットボールに若い頃何らかの形で自身が深く関わってきた人達ばかりです。

最近ではプロの王座決定戦であるスーパーボウルの開始のセレモニーでコイン トスの際、テレビを通じてホワイト ハウスから大統領が行うケースも良く見られるようになり、大統領にとっても王座の行方は大きな関心事にもなっています。

さて、学生時代にプレーヤーであったり何らかの形で自身が本格的にフットボール部で活動してきた大統領は第31代大統領ハーバート フーヴァー、第34代大統領 ドワイト アイゼンハワー、第35代大統領 ジョン F. ケネディ、第37代大統領 リチャード ニクソン、第38代大統領 ジェラルド フォードの5名が挙げられます。

異色なのはこの中には挙げられていませんが、第26代大統領のセオドア ルーズヴェルトでしょう。自身は学生時代にフットボールの有名選手であった訳でもないが、フットボールの起源と歴史の項で記述したように1905年、年間で18人の死者と159人の重傷者を出し、フットボール廃止案が沸騰しメディアにも再三その危険性や血まみれの選手の写真を大きく報道されたりし、議会でもその行き先を論議されることになった。

その時に大統領であったセオドア ルーズヴェルトはケガを回避できるようなルールの変更や中央部の密集に両チームの選手が積み重なるように集まりがちなランプレーが危険度を増すということから、フォワードパスの公認などでプレーを大きく展開できるよう大幅にルール変更をし、且つより安全な用具の開発を用具メーカーに命じ、フットボールの存続を決定した。劇的にフットボールの歴史の流れを大きく変えた大統領としてはルーズヴェルトの名は外すことはできないでしょう。

1913年、56才の時に第28代大統領に就任したウッドロウ ウィルソン（写真・1）は1878年プリンストン大の下級生にも拘わらず「フットボール アソシエーション」の部長を務め、後に1902年から1910年までプリンストン大の総長に就任しプリンストン大のフットボールの発展に大いに寄与した。



(写真・1) ウッドロウ ウィルソン
ン
(Wikipediaの歴代アメリカ合衆国大統領の一覧より)



(写真・2) ハーバート フーヴァー
大統領 (中央)

1929年、54才で第31代大統領に就任したハーバート フーヴァー (写真・2) は自身がフットボール選手として活躍したわけではなく、スタンフォード大のフットボール部と野球部の会計担当のマネージャーとしてチームの運営に携わった。当時はまだマネージャーというポジションが確立していなかったので史上最初の運動部のマネージャーの一人である事には間違いないだろう。

フーヴァーは予算を預かるマネージャーとしてユニフォーム代、用具代なども節約し資金繰りは非常にうまくいったとも云われている。

フーヴァーは1892年スタンフォード大にウォルター キャンプをヘッドコーチに招聘し、その後のスタンフォード大が強豪チームの仲間入りするきっかけを作った。

また、後に対抗戦のビッグライバルとなったカリフォルニア大との対戦交渉をし、最初のカリフォルニア大との試合で15,000席しかないスタジアムに2万人もの観衆を動員し、スタジアムは溢れんばかりであったという。そして、フーヴァーはその試合終了後にカリフォルニア大のマネージャーと入場料の計算をしたが、生まれて初めて\$30,000ドルの現金を目の前にして震えたと後に語っている。



第23話 アメリカンフットボールの歴史と大統領の関わり 第2章



大統領のフットボールを語るとき、I K E (アイク) の愛称で親しまれ1953年62才の時、第34代大統領に就任したドワイト デービッド アイゼンハワーの名は不可欠であろう。(写真・3)

(写真・3) フットボール殿堂賞の

第一回金メダルを受賞し談笑するアイゼンハワー (右)

アイゼンハワーはアーミー (陸軍士官学校) のハーフバックとして大活躍していた時、膝 (ヒザ) にフットボール生命を絶たれるような大けがを負うが、もしこのケガが無かったらNFLのドラフト1位は間違いないと云われるほどの名ランニングバックだったと云われており、一説によるとプロフットボールの選手になれなかったので仕方なく大統領になったという話がまことしやかに流れるほどであった。

子供の頃アイクはフットボール型をしたスイカをボールに見立てて兄のエドと近所の子供達とフットボール遊びを日が暮れるまでしていた。

また、地元の草フットボールチームにも入ってランニングバックとして活躍していた。

1908年、アイクの通っていたカンサスのアビリーン高校は僅か13名しか部員がいなかったがアイクの活躍もあって7勝-0敗-0分と完勝のシーズンを終えた。



1910年、アビリーン高校のフットボール部の選手数が不足していた為、アイクは卒業していたにも拘わらずOBとしてもう1年チームに参加させられていた。その後West Point (陸軍士官学校の通称) に進学したアイクは1912年、2年生の時に5試合終了した時点で、時のニューヨーク タイムズに「アイゼンハワーは東部地区のベストバックのひとりに入る」と大々的に報道され、以来アイゼンハワーは「カンサス サイクロン」と呼ばれるようになっていった。

(写真・4)

(写真・4) 陸軍士官学校時代「カンサス サイクロン」と呼ばれていたアイゼンハワーの勇姿

1912年、アーミー対イエールの試合が行われ、試合時間について両チームで25分ハーフで実施するのか30分ハーフで実施するのか検討され、結局25分ハーフで実施することに決まったが、アイクは30分ハーフを主張していた。

試合はイエール大が6-0でアーミーを倒したが、アーミーは残り時間僅かのところ自軍のペナルティで逆転できずアイクは殆ど一人でボールを持って頑張ったが、努力は報いられる事はなく幕を閉じた。その後、この試合の影響があったかどうかは定かではないが、1921年まで両校の対戦は実施されることはなかった。

また、この年アイクは史上最高のアスリートと云われているインディアン カーライル校のジム ソープとも対戦している。

足首を痛めていたアイクはこの試合ではスターターではなかったが戦前からアイクとソープの対決はニューヨークタイムスなどで話題になっていた。

しかし、この頃のソープはストックホルム オリンピックで五種、十種の両競技で金メダルを獲得した年でもあり、絶対にタックルできないと云われるほど絶頂期でもあった。

アイクとのアーミー戦でもソープは独走タッチダウンをあげたがペナルティでキャンセルされ、その直後のプレーでも100ヤード近い距離を一気にゴールまで駆け込むという離れ業をやったのけるほどで、アーミーは27-6で敗れた。

そして、1週間後のタフト大との試合でアイクはヒザを痛め、アーミーでのフットボール キャリアを終えることになるが、以降2度とフットボールをすることはなかった。

30日も入院していたが、ヒザから下が黒ずみ医者は足の切断を宣言するがアイクは兄のエドにベッドサイドに居るよう頼み、医者が来たら絶対に足を切断するからそれを阻止するためにガードして欲しいとすがり、それを聞いた敬虔（けいけん）なクリスチャンでもある母が毎日お祈りを続けたところ、その4日後に奇跡が起き黒ずんでいた足の色は元の肌色に戻っていた。

その後、米軍の総指揮官にもなったアイクは米軍基地のフットボールチームからコーチの要請を受けるが1926年にジョージア州のフォートベニング基地のボックスをコーチした以外は引き受ける事はなかった。



第24話 アメリカンフットボールの歴史と大統領の関わり 第3章



(写真・5) 第4回フットボール殿堂メダルを受賞したジョン・F・ケネディ (右から二番目)

1961年、43才という若さでアメリカ国民の熱狂的な支持を受け第35代大統領に就任したジョン・F・ケネディは暗殺というその悲劇的且つ謎の多い最後に未だに話題になることが多く、世界的な人気者だった故に関心度も高い。(写真・5)

ケネディ大統領とフットボールの出会いはマサチューセッツ州ブルックリンの私立のデクスター小学校のフットボールチームの選手としての時であった。

そして、ハーヴァード大に進学し、フレッシュマン チームに所属し体重は61kgしかなかったためJVチームのエンドとしてプレーをしたが、後に背中を負傷しフット

ボールキャリアは終わった。またフットボール以外でも水泳部にも所属していた。

ケネディはことある毎に「フットボールは最も偉大なアメリカの競技であり、自分の人生に最も楽しい時を与えてくれただけでなく、闘う勇気も与えてくれた。

それは、40年も前に観戦した伝統の一戦であるアーミー対ネイヴィ、ハーヴァード対イエールの対抗戦以来ずっと続いており、当然私もそうだがアメリカ国民が永遠に愛してやまないスポーツであることは間違いないと思う」と述べている。

1969年56才で第37代大統領に就任したリチャード ミルハウス ニクソン (写真・6) は最もフットボールを愛したというより熱狂的なファンであったことでよく知られ、それ故のエピソードも多くフットボール ファンには特に愛されていた。

1926年、ニクソンはフットボールをやりたくてカリフォルニア州のフラートン高校に進学したが大きな成果もあげられず卒業し、ハーヴァード大に進学することが決まっていたが家族の病の治療費用が大きく、実家の西部から東部の大学での生活資金を負担できず、1930年やむなく地元のホイットティアー カレッジに進学しフットボール部にも入部したが成績は学校で2番という好成绩で卒業し、1934年に奨学金を受けデューク大法学大学院で念願の法律を学び、後に自身の弁護士事務所開業し弁護士として活躍した。

フットボール部でのポジションはタックルだったが学業とは違いなかなかレギュラーにはなれず殆ど控え選手であった。

(写真・7)

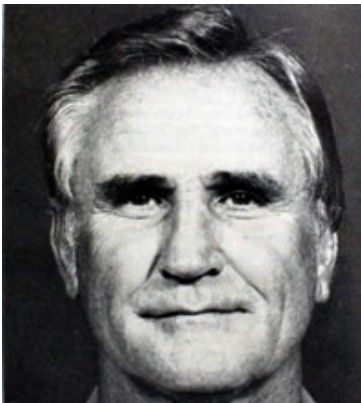


(写真・6)フットボール マニアだったニクソン大統領 (右)



(写真・7)ホイツティアー カレッジ時代のニクソン (前列左から3番目円内)

後に当時のチームメイトはニクソンについて「とにかくニクソンはフットボールが大好きで試合に出たくて出たくていつもベンチで張り切っていた。コーチがニクソンを呼びフィールドに入れると、やる気満々過ぎて相手より先に飛び出してしまいいつもオフサイドの反則をとられていたのが印象的だった」と語っているように選手としては大成しなかった。大統領に就任後もフットボール好きは変わらず、大学の王座を決めるのにコーチや記者などの投票で決めないで、NFLのスーパーボウルのように最後に真の大学チャンピオンを決める「カレッジ スーパーボウル」を実施すべきだと提案し続けていた。



(写真・8) ニクソンが度々プレーについての電話をしていた当時のドルフィンズのヘッドコーチ ドン シュラー

また、マイアミ ドルフィンズが17連勝の記録を作りスーパーボウルに出場が決まった時に、当時のヘッドコーチでしかも名コーチとしての誉れが高いドン シュラーに「今度の試合で使用したら良いプレーがある」と長々と電話してきたという話は余りにも有名である。(写真・8)

そんなフットボール好きのニクソンも妻が死去した翌年の1994年4月22日に後を追うようにニューヨークで脳卒中で倒れそのまま81才で生涯を閉じた。



アメリカンフットボールの歴史と大統領の関わり



第25話 アメリカンフットボールの歴史と大統領の関わり 第4章



(写真・9) ジェラルド フォード

(Wikipediaの歴代アメリカ大統領の一覧より)

歴代大統領の中では選手としても途中で辞めることもなく、しかも優秀な選手として挙げられコーチまで務めたのは1974年61才で第38代大統領に就任したジェラルド ルドルフ フォードの右に出る者はいないだろう。(写真・9)

ミシガン州グラント ラピッドのサウス高校でのフォードは町はもちろん州の代表選手にも選ばれるほどでラインバッカーとセンターのポジションで活躍していた。



(写真・10) ミシガン大でセン

ターとラインバカーとして活躍した
フォード

強豪のミシガン大に進学したフォードは身長188cm、体重は少し大目にサバを読み90kgと自己申告しやはりラインバッカー、センターとしてプレーすることになった。1934年にはミシガン大のMVPに選ばれ、ビッグ10のベスト11にも選ばれるほどで、サンフランシスコで行われる大学オールスターゲームのシュライン ボウルにも選抜された。

(写真・10)

そして、卒業する時はグリーンベイ パッカーズ、デトロイト ライオンズ等からオファーがあったが、フォードはプロでプレーすることより指導者の道を選び、イエール大のコーチに就任した。後に大統領よりもカレッジのヘッドコーチになりたかったと述懐しているほどコーチ業に憧れていたようである。

そのフォードもミシガン大に入学時は新人ながら色々な賞をもらうほど将来を囑望されていたが、上級生になってからのミシガン大の無敗のシーズンの時は、同じポジションにオール アメリカンのチャック バーナードがいた為ベンチを暖める事が多かった。

1976年フォード大統領がアイオワに遊説に来たときにほんの少しだが話す機会があり、日本のフットボールの話をするると随分と驚きサッカーではないのかと何度も聞き直されるほどだったが、フットボールが本当に好きなんだということが印象に残っている。

そして、ハリウッドのスターでもあった第40代大統領のロナルド レーガンは1981年に69才という歴代大統領としては最も高齢の就任でもあった。(写真・11)

1926年イリノイ州のディクソン高校ではレギュラーとして活躍し、1928年ユレカ カレッジに進学するが控えのオフENSE ラインマンとして少しプレーした程度で、コーチもレーガンは足が遅くて選手として起用するのは難しかったと云っているようにその後はプレーするより試合を報道する大学の新聞部の記者としての活躍のほうが多かった。大学でメディアの道を少しだが経験したレーガンは、1932年アイオワ州



ダヴェンポートのラジオ局でスポーツ キャスターをすることになった。

(写真・11) ロナルド レーガン

大統領



レーガンにとっての最初のフットボール ゲームの生中継はアイオワ大対ブラッドリイ大の試合で10ドルの報酬を受け取った。(写真・12)そして、1940年ハリウッド スターへの足がかりになる大ヒット映画、「ニュート ロックニイ物語」のジョージ ギップの役を演じ、既に大スターであったロックニイ役のパット オブライエンをも凌ぐ演技力で映画俳優として認められた。この時の映画監督はレーガンからはフットボール選手らしさが溢れんばかりで適役であったと述べている。

(写真・12) スポーツ中継する

レーガン

1989年には東京ドームで行われたプロ野球日本シリーズ第3戦で始球式を行っている。タフが売り物であったレーガンも病には勝てず、1994年11月5日全米の国民に向けて自身がアルツハイマー病であることを公表した。その約10年後の2004年6月5日、ロスアンゼルス近郊のベルエアーの自宅で肺炎の為死去しその波乱に富んだ人生の幕を閉じた。第34代大統領アイゼンハワー以来初めての2期8年の任期を全うした大統領でもあった。



第26話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の1 ビル ウォルシュとの出会い(1)



1976年8月16日 日本初のプロフットボール ゲーム サンディエゴ チャージャーズ 対 セントルイス カージナルスの対戦がロス在住日系2世の大富豪フランク 高橋氏と毎日新聞の尽力によって38,000人の大観衆が熱狂する後樂園球場（現在の東京ドームの前身）でキックオフされた。

当時、アメリカのプロはもちろんカレッジ フットボールにも夢中だった私にとっては日本の人に絶対に本場のアメフトの凄さをライブで見て貰いたいと常日頃思っていただけに、勝敗などを超越した熱いものが身体の中を駆け巡った感覚を今もハッキリと覚えている。

この両チームには私自身にも、また将来のNFLの発展史上に於いても大きな影響を与える事になる偶然とは思えない不思議な縁（えにし）を感じざるを得ないコーチ、スタッフ、選手が参加していた。

（写真・1）チャージャーズと東

京での試合の契約時のフランク

高橋氏（左）

中でも最もNFLの歴史に大きく関わり後にプロ フットボール界の殆どのチームに自身の教え子を送り込むほど偉大な業績を残し、私自身にも多くの事を嫌な顔ひとつせず熱心に指導してくれたのはこの当時チャージャーズの攻撃のプレーコールをしていたオフェンス コーディネーター兼QB・WRコーチのビル ウォルシュであった。



ウォルシュ自身も派手な性格ではないためかQBの指導者としては知る人ぞ知るという匠（たくみ）の分野に入るほどの手腕の持ち主であったが、この当時のシカゴ ベアーズのジョージ ハラス、マイアミドルフィンズのドン シュラー、ダラス カウボーイズのトム ランドリー、ピッツバーグ スティラーズのチャック ノルの各ヘッドコーチ達のような誰もが知るというほどの知名度はなかった。そんなビルウォルシュとの再会は私にとっても楽しみであった。（写真・2）

（写真・2）サイドラインで指示

するビル ウォルシュ



第27話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の1 ビル ウォルシュとの出会い(2)

当時のNFLのサマー キャンプは7月の第1週から始まるのが通例だった。

チャージャーズも7月の第1日曜日からキャンプがUCSD（カリフォルニア大学サンディエゴ校、ちなみにUCLAはカリフォルニア大学ロサンゼルス校の事）でオープンしたが初日は練習はなく用具係が新人選手への用具の支給や調整をし、それらを受け取った選手は自分の宿舍としてあてがわれた大学の寮の部屋に案内される。

私も初日からキャンプに参加したが自分の荷物をフットボールバッグに入れて行ったためルーキーのキッカーと間違われた。当時オクラホマ大からドラフト8位で指名されたキッカーのトニー デリエンゾとは私がオクラホマ大のバリー スウィツァー ヘッドコーチにトリプルオプションの教えを請うために2年前に大学を訪問した時に出会い顔なじみであったにも拘わらず、冗談半分で「あなたは日本のコーチだと思ってたのに本気で日本からNFLにトライするつもりなのか」と聞いてきて、当時同じオクラホマ大からテスト生としてキャンプに参加していた控えの黒人QBだったケリー ジャクソンも横で聞いていて大笑いしていたのが懐かしく思い出される。



当時チャージャーズのヘッドコーチを務めていたのはサイドラインで堂々と葉巻をくゆらせる事で奇人扱
いされていたオレゴン州立大、UCLA等カレッジのコーチ経験が豊富であったトミー プロスローで、
チェスやカードゲームのブリッジ、バックギャモンなどの名人としても有名であった。

(写真・3)

(写真・3) チャージャーズの

ヘッドコーチ トミー プロス

ロー

そのプロスローにまず挨拶に行くと案の定夜に部屋でチェスをやらないかと誘われたがルールも知らないのと丁重に断りマネージャーから滞在中の部屋の鍵をもらおうと、何とオクラホマ大の控えQBであったケリー ジャクソンと相部屋であった。

当時のオクラホマ大学はNFLの最下位のチームより強いのではと云われるほどで、攻撃はウィッシュボーン体型からのトリプル オプションを駆使しパス攻撃は皆無に近かったが、毎試合高得点を挙げ、2年連続全米チャンピオンに輝くほど無敵の強さを誇っていた。

其の中心がRBジョー ワシントン、QBスティーヴ デビスのコンビで展開されるオプション攻撃による強力なラン攻撃、ハイズマン賞を獲得したオクラホマ大出身のRBスティーヴ オーエンスの弟のWRティンカー オーエンスのパスレシーブ、守備では恐怖のフロント3兄弟と恐



れられたセルモン ブラザースが鉄壁の守備を誇り、特にタンパベイ バッカニアーズにドラフト1位で指名されたリーロイ セルモンは身長は2mを超え体重も130kg近くにも拘わらず100mを11秒台で走るという怪物アスリートで日本にも来たことがあるが一緒に空手道場に行って日本の選手と練習し、「とても怖かった」と風貌に似合わぬ情けない顔をしたのが印象的であった。其の彼もこの話を書いている最中の9月4日に56才の若さで亡くなったというニュースを聞き余りにも早い死に驚くと同時に色々な思い出が走馬燈のように駆け巡った。(写真・4)

(写真・4) バッカニアーズ時代

のリーロイ セルモン (背番号6

3)



第28話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の1 ビル ウォルシュとの出会い(3)

ケリー ジャクソンの事から思わぬ方向に話が進んだが、ジャクソンと3日ほどだったが同室で当時のオクラホマ大のことを色々話してくれた。

ジャクソンは黒人で身長は190cm弱、体重102kg、40ヤード/4秒7という俊足で、しかも強肩でもあった。



当時のオクラホマ大は前述したように攻撃の殆どがランプレーでパスは1試合で数十ヤードという極端さであった為、チームにとって彼の強肩がさほど必要でないのは理解できないこともない、しかし当時のスタートQBは自ら「I am too short, too slow (自分は小さくて足が遅すぎる)」と言って周りを笑わせるほどいつも陽気で明るい性格のスティーヴ デイヴィスという選手だった。(写真・5)

実際に、この当時のオクラホマ大の選手は殆どのスターターの選手がドラフトに指名されるのだがデイヴィスはサイズもスピードもないから絶対にプロではできないとプロ行きの事など全く気にせずサバサバして話してくれ、卒業後はテレビのサイドラインレポーターとして活躍をしていた。練習を見ているも自ら言うようにデイビスの足が特別速い訳でもなく、パスに至ってはひどいもので距離はもちろんコントロール、ボールのスピードもジャクソンとは比較にもならないほどであった。だがジャクソンと最も大き

(写真・5) オクラホマ大学QB 違いはデイヴィスは白人であるということであった。

スティーヴ デイヴィス

私は不思議に思い当時のバックス コーチにどうしてケリー ジャクソンをスターターにしないのかと聞きに行ったら自分の黒い肌の顔を指差し、カラーの問題ではないと思うけど、俺にはスタートを決める権限はないのでヘッドコーチのバリー スイツアーに聞いてくれと云われた。

当時のカレッジ、プロで今では信じられないことだがグランプリング大のように黒人中心の大学を除いては黒人のスタートQBは一人もいなかった。もちろん、ヘッドコーチにも黒人は一人もいなかった、1974年当時にもう差別はないと聞かされていたがこのような現実を目の辺りにするとまだあるのかと思わざるをえなかったが、当時はまだそのような風潮だったということかも知れない。

私の目から見てケリー ジャクソンの運動能力は高くすぐれた才能を持っていた。

そのジャクソンもキャンパー日目はQBのグループに入って練習していたが、二日目にはWRのグループで練習し、3日目にはQBのグループ、WRのグループにも姿はなくどこにいるのかと思ったらDBのグループとキック リターナーのグループで練習していたのが目に入った。

結局、そのまま解雇通告され翌日の朝食後いなくなり日本での再会の夢は終わった。

その後、ジャクソンはNFLのチームを数チームテスト生としてキャンプに参加したがどこも採用するところはないと聞いた。ジャクソンが凄いアスリートであるというのは単なる私の思い過ごしだったのかも知れないが、そのことから既に35年経っているが今でもなかなかそうとは思えない。

当時のサマーキャンプでは朝食を受け取るトレーにコーチからのメモが入られるのだが、これが解雇通告で、採用かどうかのギリギリの線上にいる選手は朝食の時間が一番イヤだと言っていたのが理解できた。

解雇通告された選手の中にはコーチ達が食事を摂っている別室に来て、「コーチ、俺はまだこんなに身体はタフだ」とコーチの目前で腕立て伏せなどを何百回もやってもう一度チャンスを与えてくれと懇願する選手もいる。私はこの時初めてプロというものの厳しさを知った。

ジャクソンは解雇通知を受け取った後、コーチがキャンプ初日に私を日本のセミプロチーム（社会人チームの事をそのように表現した）のヘッドコーチをしていると紹介したので、彼は私に日本のチームで採用してもらえないのかと聞いてきた。今なら方法はあっただろうが当時は全く無理な話であり、今でも思い出すと何とかならなかったのかと悔いが残る出来事であった。



第29話

久保田 薫 アメフト マンダラ

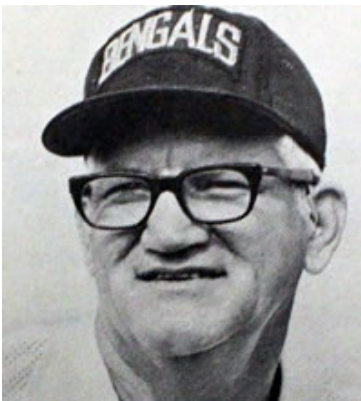
其の1 ビル ウォルシュとの出会い(4)

さて、本題のチャージャーズのオフェンス コーディネーターに就任したビル ウォルシュの話に戻すと、ウォルシュのコーチ歴は長く、どちらかと言えば大器晩成型で若い頃は苦労が多かったのではと思われる。

ウォルシュが初めてヘッドコーチに就任したのは1957年カルフォルニア州フェアモントにあるワシントン ユニオン高校で、彼が就任するまで過去3年間で勝ったのは僅か1度だけだったが、ウォルシュがヘッドコーチに就任するとすぐ9勝1敗の成績を収め地区優勝するほどになった。

1960～62年には後のプロ コーチとしての成功への道案内人とも云えるマーブ リーヴィの率いるカリフォルニア大学のディフェンス コーディネーターを務め、1963年からは3年間当時のカレッジ フットボール界の一大派閥であったジョン ラルストン率いるスタンフォード大学でラルストン ヘッドコーチの補佐とDBコーチを務めた。

1966年、NFLのコーチとして歩み出し、アル デイビス率いるオークランド レイダースのオフェンスのバックスコーチを務め、1年後にポール ブラウンがヘッドコーチを務めるベンガルズにパス攻撃コーディネーター、QB、WRコーチを務め攻撃のプレーコールも任されるほどブラウンに信頼されていた。



そのブラウンが1975年に引退を表明したが、その時メディアやファンも次期ヘッドコーチは100%ビル ウォルシュだと思い込んでいたところ予想もしないビル タイガー ジョンソンがヘッドコーチに指名され、プロ フットボール界は一時騒然とした。私もそうだったがウォルシュ自身も当然自分がヘッドコーチに指名されると思い込んでいたようであった。(写真・6)

(写真・6) ベンガルズのヘッド
コーチ ビル タイガー ジョンソ
ン

この時のベンガルズのヘッドコーチ就任劇にまつわる実際の話は本当にひどいものだった。

ウォルシュは高校のコーチを3年、カレッジのアシスタント コーチを6年、NFLのアシスタントをチャージャーズも含めると10年と下積みは短いものではなかった。

苦勞も多かったが水泳のコーチや選手としてボクシングもやった経験があるがやはりフットボールの面白さにはどの競技も勝てないと思うし、基本的にフットボールが大好きだったことがそれまで我慢できたことだともも言っていた。

ポール ブラウンはウォルシュの才能を早くから見抜いており、ウォルシュがベンガルズのアシスタントとして在籍した8年間の間、毎年のようにNFLの他のチームからヘッドコーチ就任のオファーがあったがブラウンがウォルシュに知らせず全て潰していた。

そして、自身が引退する時にもNFL全チームにウォルシュをヘッドコーチとして要請しないように圧力をかけ妨害していたという。ウォルシュはまさかあのポール ブラウンが自分の出世を妨害しているなんてそんなことは全く知らなかったし信じるはずもなかった。だが後にその話を聞かされ目の前が真っ暗になったという。

そのショックは余りにも大きかったが、カリフォルニアンとして同じラルストンの門下生でもあり良い意味でのライバルでもあった親友のマイク ホワイトはすでにヘッドコーチとして注目をあびており、この時もカリフォルニア大学のヘッドコーチとして活躍しており、NFLのサンフランシスコ 49ersからも声がかかりそうな気配であった。



そんなことも重なり傷心の思いで8年も務めたシンシナティの土地を離れ地元のカリフォルニアに帰ることを考えたが、ウォルシュにはサンフランシスコ、オークランドからは何のオファーもなく、失意のどん底の時にサンディエゴ チャージャーズからアシスタント コーチとしてのオファーがきた。とにかく大好きなカリフォルニアには違いないのですぐその話を引き受けることにした。（写真・7）

（写真・7）サンディエゴ チャージャーズ時代のビル ウォルシュ
（左）とスターQB ダン ファウツ
（右）

そんな時に私はビル ウォルシュに出会ったのである。



第30話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の1 ビル ウォルシュとの出会い(5)

キャンプでの毎日は朝から晩まで楽しいことばかりであった。

午前中の練習前と午後の練習前そして夕食後と各ポジション毎に分かれフィルム ミーティングが実施されるが、当時はNFLもカレッジもまだビデオを使用しておらず全チームが16mmのフィルム即ち映画を撮影するような映写機数台でフィルムを回してポジション毎の練習風景やスクリーンショット、試合などを撮影していた。



まず午前中の練習フィルムは選手達が食事している間に現像し、すぐ各ポジション毎に編集焼き増しして各ポジション毎のミーティング ルームの前に置いて行くのだが、映画の現像所のような設備をプロ、カレッジを問わずに全チームが持っていたのである。(写真・8)

私は暗室にもいれてもらいその現像から編集、焼き増しまでの作業を見せてもらったが大変な作業であり、そのフィルムの保管場所も16ミリフィルムのリールの中心部に鉄棒を通し対戦チーム別、各ポジション別に仕分けられドーナツをぶら下げるような形で直径30cmくらいのスカウティング フィルムがぶら下げてあり広大な場所を占拠しており、現在のビデオ テープから更にディスクになったことを考えると夢のような進歩である。とにかく選手は食事して午後の練習前のミーティングには午前中の練習のフィルムが編集されて見ることができるとの当たり前になっているので、裏方がとんでもない努力をしているのを知っている選手は少ないと思われる。

(写真・8) 16mmフィルムを

見ながら分析するコーチ達

私はいつもウォルシュの担当するQBとWRのミーティング ルームに欠かさず参加させてもらい、練習のフィルムを見たが短時間で仕上げたとは思えないほど見事な編集であった。

また、夜になって食事、ミーティングが終わった後、ウォルシュは毎夜私を自室に呼んでくれてプレーブックを開いてオフェンスのシステムやオーディブルの仕方、パス オフェンスの基本、レシーバーのルートなど毎日1時間半ほどかけて事細かく特訓してくれた。

私が最も興味があったクォーターバックを指導する際、最も大事な事は何ですかと聞いたら、答えは実に単純なことで「センターからスナップされたボールをきちんと受け取ること、次にケイデンス（ボールをスナップするタイミングの合図もしくはプレー変更の暗号のかけ声など）を大きなハリのある声でみんなに聞こえるよう叫ぶこと」という聞けば当たり前のことではあるがなるほどというより余りにも普通だったので驚いた。

実際にQBは毎日通常の練習開始の30分前にはグラウンドの隅っこで大声を出す練習をしているのが見られた。

しかも、ウォルシュは私に講義をしてくれる際、部屋の冷蔵庫を開けてごらんと言われ、開けて見たら日本のビールが

ギッシリと並べられていたので、別に禁酒ルールだった訳でもないがキャンプで酒、タバコを口にする選手は一人もいないほどの中でこのもてなしには嬉しくもあり驚いた。サンディエゴには日本食も豊富にあるし当時まだ日本製のビールがアメリカに余り普及していない時であったがここには充分あるから用意しておいたと言われ、その気遣いと優しさに本当に感動したのを覚えている。この時のビールをたしなみながらウォルシュから受けた講義は私の大きな財産になっている。



また、このキャンプではちょっとした事件というよりハプニングがあり、オレゴン大から最もプロ向きのQBという評価で鳴り物入りで入団しスタートQBであったが、期待を裏切るような並の成績しか残せず、到底芽が出る様子もなく4年目を迎えたダン ファウツがキャンプの2日目からキャンプを脱走しなくなったのである。（写真・9）

（写真・9）チャージャーズで多くのNFL記録を作ったダン ファウツ

その3日後にフラツと戻ってきたがメディアにもみくちやにされながらもニコニコ笑いながらウォルシュの部屋に謝罪に行き、ケロツとした顔で部屋から出て来た。

夜にウォルシュから聞いたが、どうもファウツは身体に似合わず気が弱く、ウォルシュが凄く厳しい指導者だと思い込んでいたようで他のチームにトレードしてもらおうか、ダメなら退団しようかと思いつめていたようである。

だが、ウォルシュの話をじっくり聞いてからファウツは人が変わったように目付きも変わり、次の日からウォルシュの英才教育を受けることになり日に日に向上していくのが目に見えた。

その1ヶ月後に東京で再会したが、ウォルシュは顔を見るなり「東京はアメリカと違ってチップがいらぬのがイイネ」というのが最初の言葉であった。

東京での初のNFLの試合はやはりパス オフェンスを得意としエア コリエルと呼ばれていたヘッドコーチ ドン コリエルの率いるセントルイス カージナルスとの対戦で20 - 10で敗れはしたがウォルシュにとってもファウツにとっても収穫は多くあった。

余談だがドン コリエルは後にチャージャーズのヘッドコーチに就任しファウツを使ってNFLのパス攻撃の記録を全て塗り替えるほど大活躍を見せることになり、ダン ファウツもNFL屈指のパサーとして名を残すことになっていくのである。

この時の対戦相手であったカージナルスのQB陣の中に、ベンガルズ時代にウォルシュから指導を受けたサム ワイチというQBが既に大スターであったジム ハートの控えQBとして来日していた。

サム ワイチについても後に詳しく書きますが、ワイチとの関わり合いというのも最初に書いたように本当に不思議な縁（えにし）で結ばれているような気がします。



第31話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の2 ビル ウォルシュいよいよNFLヘッドコーチに(1)



(写真・1) ビル ウォルシュ

1977年の春、所用でスタンフォード大学に立ち寄り用事を済ませキャンパスを歩いていると突然後ろから肩をたたかれた、こんなところで肩をたたかれるような知り合いもいないので落とし物でもしたのかなと振り返ると驚いた事にビル ウォルシュが微笑んで立っていた。(写真・1)

サンディエゴにいるはずなのと思わず聞くと、何故か口に手を当てシークとする仕草をし時間があるのならちょっとコーヒーでも飲まないかと言われカフェテリアに入った。テーブルについてからウォルシュは凄くうれしそうにフットボールコーチというより大学教授と言われたほうがピッタリのおだやかな風貌で「実はスタンフォード大学のヘッドコーチを引き受けることにした、明日の新聞には出ると思うけど一応それまでは内緒にね」と突然切り出した。

ベンガルズのアシスタント コーチとして8年間耐え、次は絶対に自分がヘッドコーチだと信じて疑わなかったが見事に裏切られ、自分はそのような星を持っていないのかも知れないと半ばあきらめながらも、それでもNFLのヘッドコーチの夢を捨てずにチャージャーズからのアシスタント コーチのオファーを将来の夢の実現への布石として引き受けた。まさか、僅か1年でカレッジに戻ってしまうとは、とにかくビックリした。

しかし、話を聞くとウォルシュはサンフランシスコ ベイ エリアに強い憧れを持っていたようでカレッジならサンフランシスコのスタンフォード大学かサンフランシスコからベイブリッジを渡って少し北に行くとパークレイにあるカリフォルニア大学の本校、NFLならサンフランシスコ 49ersかやはりブリッジを渡ったオークランドにあるレイダース等いずれかのチームのコーチをして住居も構えるというのが夢だとも言った。

サンディエゴ チャージャーズのオフENSE コーディネーターを僅か1年で辞めしかもヘッドコーチとはいえカレッジに逆戻りというのも随分悩んだとも言っていた、NFLで功成り名を遂げて最後の奉仕のつもりでカレッジのコーチをするという話は時々ある。現にウォルシュも49ersで成功を収めた後に再びスタンフォード大に戻ってコーチを務めている。

しかし、この時点でのウォルシュはまだ何も成し遂げていなかった。

ただ、アシスタントではなくヘッドコーチであり念願のベイエリアのスタンフォード大という事と恩師であるジョン ラルストンの薦めもあったことが唯一の慰めであったかも知れないが、カフェテリアでのウォルシュは本当に嬉しそうに終始笑顔で話してくれた。



第32話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の2 ビル ウォルシュいよいよNFLヘッドコーチに(2)

スタンフォード大での1年目は8勝3敗で6年ぶりにボウルゲームに出場しサンボウルでLSUに24-14で勝利しチームの所属するリーグのPAC8カンファレンス最優秀コーチに選ばれ、翌78年も8勝4敗の好成績でブルーボンネットボウルに出場、シーズン中の対戦で22-0と完敗を喫したジョージア大と再対戦したが25-22で雪辱をした。

そして、ウォルシュが初めて高校のヘッドコーチを務めてから22年後の1979年1月9日に遂に念願のしかも最初に教えた高校の対岸にあるサンフランシスコ49ersの11代目ヘッドコーチに就任が決まった。



(写真・2) スタンフォード大学時代のビル ウォルシュ

遂にウォルシュの故郷とも云えるバイエリアの名門プロチームのサンフランシスコ49ers(ゴールドラッシュに沸く1849年にサンフランシスコの砂金を求めて多くの人々が東部から一攫千金を夢見て我先にと駆けつけたが、その金を求めて集まってきた人達の事を49ersと呼び、それをチームのニックネームに使用した)からヘッドコーチとしてのオファーがきた、これはウォルシュにとって願ってもない話で、いつかはと思っていたもののまるで夢のようであった。そして、その2年後の1981年のレギュラーシーズン地元キャンドルスティックスタジアムでの最終戦であったヒューストンオイラーズとの対戦をプレイオフに出られそうなので観に来ないかと連絡をもらい、オイラーズに28-6で圧勝した後1979年に49ersからヘッドコーチとしてオファーがあった時は身体の震えがとまらないほどで人生であれほど興奮したこともなかったし、嬉しさも例えようのないほどであったと語ってくれた。(写真・2)

この時ウォルシュは47才であった。

NFLのヘッドコーチとしてはこれが初めてであったが、アシスタントコーチ時代や大学のコーチ時代に指導し、後にフットボール界を代表するQBやコーチになった選手も枚挙に暇(いとま)がないほどである。

ベンガルズではケンアンダーソン(写真・3)、後にベンガルズのヘッドコーチになりスーパーボウルで師匠であるビルウォルシュの49ersと対戦することになるサムワイチ(写真・4)、チャージャーズではダンファウツ(写真・5)そして49ersでは伝説のQBと云われるジョーモンタナとスティーヴヤング(写真・6)などNFLのレコードブックに名を残すような名QBを多く育てた。中でも教え子をヘッドコーチとして送り込んだチームは必ずと言っていいほど強くなっていった。[\(参照 ビル ウォルシュ Coaching Tree\)](#)



(写真・3) ベンガル (写真・4) ウォル (写真・5) ウォル (写真・6) 49ersの

ズのコーチ時代に指導 シュの愛弟子でベンガ シュがチャージャーズ QBヤング (右) に指
したQBケン アン ルズのヘッドコーチ時 のコーチ時代に育てた 示を出すウォルシュ
ダーソンと 代のサム ワイチ QBダン ファウツ (中央)、左はモンタ
ナ



私が観戦したオイラーズ戦は81年のシーズン最後のホームゲームであったが対戦チームの選手紹介の時
にオイラーズというより当時のNFLを代表する名RBであり私も大ファンであったタックラーから絶対
に逃げず真正面からぶつかっていく豪快なランニングスタイルのアール キャンベルが紹介されると大
ブーイングかと思いきや敵地でありながら盛大な拍手で迎えられたのにはさすがと思わせるものがあ
った。(写真・7)

(写真・7) 1981年キャンド

ルスティック スタジアムでの
ヒューストンオイラーズ戦

さて、そのオイラーズ戦ではスポット席で観ていたが最初のシリーズで絵に描いたような攻撃を展開し自陣20ヤード
から一気にオイラーズのゴール前まで詰め、4thダウンで数センチになったが通常ならゲーム開始後まだ数分しか経っ
ていないのと、点はとれるときに3点でもいいから絶対にとっておくという鉄則(皮肉な事にウォルシュから教わったの
だが)からしても、ここは無難にFG(フィールドゴール)かと思っていると意外や相手守備の外側へのランプレーの選
択といういきなりのギャンブルプレーであったが、オイラーズのディフェンスに読まれ2ヤードのロスとなりしかも攻守
交代で大きな先制のチャンスを逃した。地元のファンから大ブーイングが起こったがコーチの間では負けはしないと読
んでいたせいか悠然としていた、が観ていた私はウォルシュらしからぬ強引すぎるとも思える攻撃に正直言って驚いた。



第33話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の2 ビル ウォルシュいよいよNFLヘッドコーチに(3)

私とサム ワイチとのことは後に詳しく書きますが、彼が選手生活を終えてから仕事付き合いで再会することになり以後何度も会っていた。

その後突然ウォルシュから49ersのQBコーチとしてオファーがありフットボール界に復帰することになりこの試合ではサムがスポッターを務め私もその横に座らせてもらいプレーコールやウォルシュからの指示などをヘッドフォンを通じて聞く機会が与えられた。

当然、最初のゴール前のギャンブルの失敗の後プレーのチョイスについて意見を聞かれたので自分の思っていることを正直に話した。

試合は49ersが出足でつまずいたものの予想通り楽勝ペースで後半に入った。

そして、再びゴール前2ヤードで1stダウンを獲得したが3rdダウンで開始早々のゴール前同様ゴール前数センチまで前進していた。

すると突然サムが私にゴールラインオフENSEのプレーリストを見せ、失敗しても相手にボールを奪われなかったら最後のダウンが残っているからその時はFGを蹴るから遠慮せず良いと思うプレーを自分でチョイスしてみると云われ、余りにも突然のことだったが遠慮したりしている時間などないのとかんなチャンスは2度とないだろうと咄嗟に思い、左のオフタックルへのトラッププレーをコールしたら大きなホールが出来悠々とTDすることができた。

まさかNFLのチームでプレーをコールできるとは思わなかったがごく普通にできたのは自分自身でも驚いた。



そして、このシーズン後のプレーオフも勝ち進みスーパーボウル初出場のみならずスーパーボウルもあの多くの確執と因縁のあったビル タイガー ジョンソン率いるシンシナティ ベンガルズと対戦することになりメディアも大変な盛り上がりようだったがウォルシュは冷静でいつも平然としておりプレーも淡々とコールしていた。

この試合はTBSで衛星放送され私も解説させていただいていたのですが、ハーフタイムに何とウォルシュとワイチの両コーチが「ブースのドアに」JAPANと書いてあったのでノックした」と我々の放送ブースに挨拶に来てくれたのである、前半は一応49ersがスコア以上に有利に試合を進め20-0とベンガルズを0封しているもののそんなに大差がついているわけでもなく、後半逆転される可能性も充分考えられるゲーム展開でしかも初出場なのに、その余裕には本当に感心させられた。

もちろん、ウォルシュの思い通りのゲームプランが見事に成功し後半追い上げられたものの自分の人生をも変えたベンガルズに26-21で勝利し初制覇を成し遂げ、その後も第19、第23回スーパーボウル

を制覇し49ersのヘッドコーチを有終の美で終えた。(写真・8)

さて、このスーパーボウル出場に於いてもと云うよりウォルシュがヘッドコーチに就任して以来49ersが強豪チームとして一目おかれるようになるがその過程が不思議な縁(えにし)としかいいようのないようなことがいくつもあった。

49ersでのウォルシュのコーチ生活は誰が見ても順風満帆の歩みに見えただろうがその過程はまるで小説以上のドラマを観ているようでもあった。



第34話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の2 ビル ウォルシュいよいよNFLヘッドコーチに(4)

今、日本でも楽天の田中投手と日本ハムの斉藤投手の因縁がよく話題に上るが、斉藤投手については「彼は持っている」という言葉が流行語のようになっているが、正直言って斉藤投手がダルビッシュ投手のような押しも押されぬ大投手だとは誰も思っていないと思われる。

しかし、何故か大きなピンチを迎えても何となく切り抜け終わってみれば勝利投手になっているという姿を認識しているファンは多くおられると思います。

ビル ウォルシュの49ersのヘッドコーチとしての戦績を見ると、10年間で3敗以下のシーズンは1981年の3敗、1984年の1敗、1987年の2敗と3シーズンしかない。

そのうちの2回はスーパーボウルも制覇しプロの王座に輝いているが1987年はディヴィジショナルプレイオフで敗れてしまい、逆にウォルシュの最後のシーズンとなった翌1988年には10勝6敗であったが3度目のスーパーボウルチャンピオンの座についた。

ウォルシュの人生において49ersのヘッドコーチに就任するまでの23年間のコーチ生活はコーチ業が何より好きだと言ってもとても我慢できるようなものではなく想像を絶するような忍耐と屈辱の日々であった。

特にウォルシュはベンガルズにいた8年間に受けた屈辱感は普通ではなかったと思うが、ウォルシュは恨むこともなく逆にその事を教訓とし自分が他人に接する時は「その人を大切にする」というごく単純なことを信条とするようになった。

実際、ウォルシュの運命は49ersに移ってから過去の辛い忍耐の日々とは縁のないような華やかな毎日で突然全てが良い方向に向かいだした。

ウォルシュはどんな素晴らしい選手でもコーチ、マネージャー、広報マンであろうと、チームがそれらの人達の事をどれだけ真剣に考えてくれ、自分を大事に思ってくれているか、そのことがチームに関わっている人全てに判るようなチームの組織にしたいと常々言っていた。



ベンガルズのオーナー兼ヘッドコーチのポール ブラウン（写真・9）に自分の将来を遮られるような妨害を受けたが、次に会ったチャージャーズのヘッドコーチのトミー プロスローには常に人の成功を願って接するという事を教わり、実際 ウォルシュもすぐ次の道に進むよう進言されアドバイスまでしてもらった。

だから、ビル ウォルシュの元で仕事をした多くのアシスタント コーチがNFLの多くのチームからヘッドコーチにと誘いがあっても決して妨害するようなこともなく喜んでそれぞれのコーチを送り出し、例えば教え子が宿敵のヘッドコーチとして招聘されていても相談事があればいつでも聞いているという。

（写真・9）ベンガルズのオーナー兼ヘッドコーチだったポール ブラウン



第35話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の2 ビル ウォルシュいよいよNFLヘッドコーチに(5)

ウォルシュが49ersの第11代目のヘッドコーチに就任したのは1979年1月であったが、とりあえずの最初の大仕事はドラフトで優秀な新人を獲得することであった。

もちろん、NFLでのチーム作りと云えば守備も当然大事だがパス攻撃は殆ど持って生まれた天性によるものが大きい。その為には優秀なQBとレシーバーの獲得、そしてオフラインに堅牢なパスプロテクションをできるように指導することが一番である。

以前にも少し書いた事があるが、ウォルシュがチャージャーズでQBコーチをしているときに「QBの指導にあたっての秘訣を教えて欲しい」と聞くと「まずセンターからのスナップがきちんと捕れること」、そしてこれは余りにも当たり前なので前回では書かなかったが「元々素質のある良い選手をスカウトすること」という全く騙されたような回答であったが、ウォルシュはコーチ生活で初のプロチームのヘッドコーチになったがここで「持ってる選手」と運命的とも云える出会いをすることになり、結果としてその出会いがウォルシュの評価を高める最大の要因でもあった。

一発タッチダウンのロングパスよりも効果的なパス攻撃が構築できれば絶対に負けないという持論のウォルシュにとっては強肩のQBは必要ではなかった。

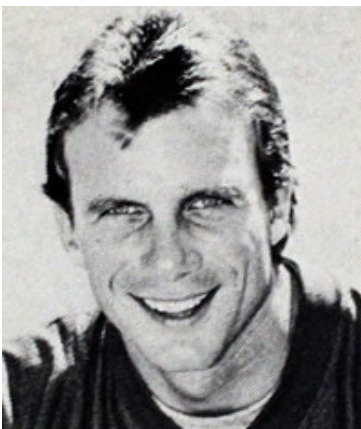
彼がチャージャーズのQBコーチをしていた時から目をつけていた大学のQBがいた、クレムソン大のスティーブ フラーである。

彼は何度も大学に出向きフラーとも話し頭も良く性格なども申し分ないことを確認していた。

そして、49ersでヘッドコーチという絶好のポジションを得たウォルシュは自身の描くオフenseに最も適しているQBとしてフラーをドラフト1位で指名すると決めていた。

ところが全く予想もしていなかったカンサスシティ チーフスが先にフラーを指名してしまった。

こんなことはフラーから全く聞いた事もなかったしメディアからもそのような情報は全くなかった。



ヘッドコーチ1年目にいきなりそのオフenseを率いさせる予定にしていたQBが獲得できないという大きな誤算が生じてしまった。

良いQBは殆ど1巡目で決まってしまうので2巡目3巡目になるとプロですぐ使えるようなQBは残っていないのが常識である。とはいうものの49ersのQB陣ではサンノゼ大出身でウォルシュも学生時代から良く知っている3年目を迎えたスティーブ ディバークぐらいしかいないのでQBを補充する必要があった。

そして、3巡目になってルーキーのリストを見ると名門ノートルダム大出身でサイズとしてはさほど大きくもなく、どちらかというひ弱さを感じさせたが大学時代は何度も大逆転劇を演ずるなどそこそ名前

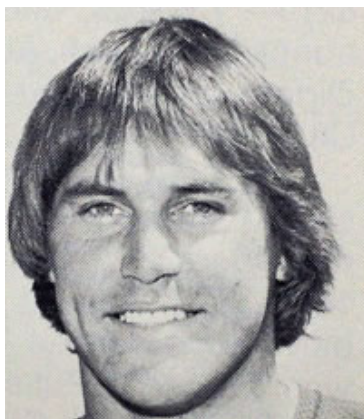
(写真・10) QBジョーモンタナは知られていたジョーモンタナがまだ指名されずに残っていた。(写真・10)

(49ers メディアガイドより)

この時代の各チームのスカウト達はQ Bの第一条件が強肩であるということであった、モンタナは神がかり的な逆転劇を大学時代から数多く演じてきているがやはりスカウトからは評価が低かった。

それとN F Lのハードな守備陣に立ち向かえる逞しさに欠ける面があるという風評もあってか名門大出身にしては3巡目まで指名されずにいたと思われる。

ウォルシュは当然モンタナを知っていたので、肩は強くないがとりあえず動ける脚力があるので自身の求めるオフェンスには使えるかもという気持ちで3巡目(全体の82番目)にモンタナを指名することにした。



そして、1位で指名する予定のフラーが他チームに獲られたために余った一人分のドラフト権でスティーヴ フラーを得るために何度も訪れたクレムソン大のレシーバー陣の中にさほど俊足ではないがガッツがあつてパス レシーブが上手いという選手がいた事を思い出し、ドラフト10位(全体では249番目)でどこのチームも指名しそうになかったWRのドワイト クラークを指名した。(写真・11)

普通N F Lのドラフトで10巡目で指名された選手はサマーキャンプまでもてばいいほうでありN F Lにドラフトされただけでもましかと自身を慰める程度のものであった。

(写真・11) WR ドワイト ク

ラーク

(49ers メディアガイドより)



第36話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の2 ビル ウォルシュいよいよNFLヘッドコーチに(6)



(写真・11A) モンタナのロッ

カー

入団後のモンタナは新人の1979年は1試合だけ先発し、翌80年は7試合に先発し頭角を現し始めた。

そして、1981年全試合に先発を務め、その年に49ersも初出場となった第16回スーパーボウルのMVPに選ばれた。(写真・11A)

この当時NFLを代表するQBとして認知されていたやはりウォルシュの元教え子であるチャージャーズのダン ファウツ、スティールズのテリー ブラッドショーを追い越す勢いであった。

私がモンタナと最初に出会ったのは全米大学オールスター戦(Japan Bowl)で東軍の2番目のQBとして来日した時であった。

私はこの試合のテレビ中継の解説者でもあったので実況担当の石川アナウンサーと毎日練習を見に行き、その後各選手にインタビューして解説の資料としていたものだが、モンタナにインタビューした時の第一印象はとても暗い感じで、顔色も青白く喋る声は聞き取れないほどボソボソと小さく華やかさなど微塵も観られず、そんなことは絶対ないのだがドラッグでもやってるんじゃないかと思っただけの覇気がなかった。

た、いいように解釈すればシャイ(恥ずかしがり屋)なのかも知れない。

実際、試合でも2番手に出て来たが大した活躍もしなかったような記憶しか残っていなかった。

このJapan Bowlに選ばれた選手の中にはNFLのスカウトから高評価をされている選手が大半であったが、中には殆ど評価されていない選手も含まれていることがあり、そんな中からNFLでもやっていける選手を見いだすのが私の個人的な楽しみであった。

モンタナも評価の低い部類に含まれていた逆で逆に楽しみにインタビューに行ったが、会ってやはりこれではNFLは無理かなと思ってしまうほどであった。



(写真・11B) 80年代の49

ersのトレーニングルーム

そして、前述した81年49ersのシーズン最後となるホームゲーム ヒューストン オイラーズ戦に勝利しプレイオフ出場を決めた試合終了後ちょっとした事件が起こった。

試合終了後スタジアム上段のスポッター ブースからサム ワイチと一緒にロッカールームに向かって歩いている時、突然けたたましく警報がなり「今 スタジアムに爆弾を仕掛けたという電話があったので速やかに場外に退避して下さい」というアナウンスが流れた。

ワイチはとにかくロッカーに行ってみようとスタジアムの観客席の下のローカールームへの通路を歩いていると薄暗い通路途中の階段のところにトレーニング ジャージの上下にゴム草履という誰かわからないような姿でモンタナがポツンと座っていた。(写真・11B)

ワイチが声をかけると蚊の鳴くような情けない声で「モンタナを殺してやる、スタジアムにも爆弾をしかけた」と電話が

あったと言われ、「とりあえず人目につかない場所でジッとしているように」と言われたと答えた。

不思議なことに彼のそばに警備員やガードマンは一人もついておらず心配なので我々もその横に座ることにした。

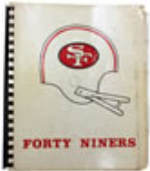
東京であった時と大して変わったと思えず、相変わらず弱々しい感じは同じであった。

結局1時間ほどしてから何事もなくスタジアムを出ることができワイチがモンタナに家まで送ろうかと聞くと「今日は車を置いてキャブ（タクシー）で帰る」と言い別れた。

爆弾騒ぎが解決するまでの約1時間の間、モンタナは日本で私と会ったことも思い出したようで、急に明るくなり大学時代の事、日本への興味 特に京都など古都に関心があり機会があれば是非訪問したいということ（実際はその後に京都観光に夫人同伴で来日し再会することになる）など話すうちに時間が過ぎた。

ワイチは私をダウントアウンのホテルまで送ってくれ、着いてから部屋でまた49ersのプレーブック（写真・12）を開きオフェンスのシステムについて熱心に教えてくれた。（写真・13）

この数週間後何か陰があり暗い感じのおよそNFLのスターQBらしからぬ風情だったモンタナが豹変し全米に注目されることになる。



（写真・12）1981年当時の49ersのプレーブック
（1）



（写真・12）1981年当時の49ersのプレーブック
（2）



（写真・13）ホテルで筆者にプレーブックの説明してくれるサム ワイチ



第37話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の2 ビル ウォルシュいよいよNFLヘッドコーチに(7)

さて、同期で同じくドラフトで249番目という下位で指名されたというより、余ったドラフト権でウォルシュが意中のQBをリクルートしている時にたまたまそのQBのパスを巧みに捕球しているレシーバーを覚えていた。



意中のQBはチーフスに先取りされ、代わりに81番目までドラフトされずに残っていたモンタナを仕方なく指名し、余ったドラフト権でドワイト クラークというWRをついでにというようなニュアンスで指名した。(写真・14)

本来なら49ersでプレーしていなかったかも知れないこの二人が現在でもNFLの伝説になっているほどの歴史に残るプレーを披露しチームはもちろん大きく二人の運命をも変えた。新人の1979年は二人とも出場機会は少なくこれといった活躍もなく目立つような数字も残さなかった。

(写真・14) WR ドワイト ク

ラーク

翌80年、モンタナはシーズンの半分の試合に先発として起用されパスで1,795ヤードを獲得し15TDパスを投げ、チームの司令塔として頭角を現し始めた。

一方レシーバーのドワイト クラークも同期のQBでもあるモンタナの信頼に答え16試合中12試合に先発として起用され、パスレシーブで991ヤード獲得し8TDパスをあげている。

そして、1981年モンタナもクラークも共に全試合にスターターとして起用され文字通りチームの顔として全米に知られるようになった。(写真・15・16)



(写真・15)サイドラインでのウォルシュと
モンタナ



(写真・16)サイドラインでのウォルシュと
クラーク)

モンタナは前年の2倍の3,565ヤードをパスで稼ぎ19TDパスを決めた。

クラークも当然だがモンタナのターゲットとして1,105ヤード獲得し、モンタナのターゲットが増えた関係もありTD数こそ4TDと減ったがその信頼度は大きく増した。

この年、1972年以来のNFC西地区1位、そしてチーム創設以来初のNFCのチャンピオン、遂には初のスーパーボウルに進出しAFCチャンピオンの因縁のベンガルズをも倒し第16回スーパーボウルで初の王座に就きプロの頂点に立ったのである。

レギュラー シーズン終了時には49ersの人気は沸騰するばかりであった。

もちろん、好成績によるものが大きかったがQBジョー モンタナとWRドワイト クラークの人気が特にすさまじく、モンタナからは暗さが消え透き通るようなブルーの瞳に控えめのはにかんだようなシャイな笑顔が女性のハートをときめかせ、ドワイト クラークは典型的なヤンチャなアメリカン ボーイという表現がピッタリのいたずらっぽいハンサムな顔立ちがやはり女性ファンを熱狂させた。現に二人ともテレビのCMや雑誌のインタビューでもひっぱりだこであった。後にモンタナはモデルだった女性と結婚し、クラークはミス アメリカを妻として迎えた。

さて、本題に戻すと1981年のシーズン最後のホームゲームであった名RBアール キャンベルを擁したヒューストンオイラーズに完勝し、ニューオリンズでの最終戦のセインツにも21-17で勝ち72年以來のNFC西地区1位になりプレイオフに進出を決めた。

プレイオフ第一ラウンドの対戦相手は地元キャンドルスティック スタジアムにニューヨーク ジャイアンツを迎えての対戦だったが38-24で圧勝し、翌1982年1月10日初のNFCチャンピオンを目指してやはりホームのキャンドルスティック スタジアムに60,525人の大観衆を集め、強豪ダラス カウボーイズを迎えた。

カウボーイズはプレイオフの常連チームで雰囲気呑まれるようなことはなく悠然としていた。

一方の49ersはレギュラーシーズンの第6戦目にやはりホームにカウボーイズを迎え45-14と完勝しているにも拘わらず初のチャンピオンシップ ゲームの為にどこか落ち着きがなかった。

この時期のサンフランシスコにしては珍しく快晴で大観衆の熱気もあってか思ったよりは寒くなかった。

ゲームは地元49ersがモンタナからソロモンへの8ヤードのTDパスで先制したが、予想通りゲームは伯仲し点のとりあいのシーソーゲームになった。

前半を終えカウボーイズが17-14と3点リードし後半戦にはいった。

第3Qは49ersが7点追加し逆に21-17で最終の第4Qを迎えた。

リードされたカウボーイズは猛反撃をし試合終了まで残り時間4分54秒で27-21と6点リードし遂に逆転した。



第38話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の2 ビル ウォルシュいよいよNFLヘッドコーチに(8)

モンタナはノートルダム大での最初の年の1974年は殆ど試合に出ることもなくコーチにもさほど注目されていなかった。

2年生の時のノースカロライナ大との対戦で途中出場したが、14-6と8点差でリードされていた、試合終了まで残り1分02秒 モンタナはパスを投げまくった、結局この短時間に129ヤードを投げ遂に21-14と大逆転劇勝利を収め、モンタナの名を知らしめることになった。だが、これだけではなかった、次に空軍士官学校との対戦では30-10と20点もの得点差をつけられた第4Qから途中出場し31-30の大逆転撃を2試合続けて演じて見せたのである。だが1976年のシーズンが始まる直前に肩を脱臼し、その年は選手登録せず翌年に賭けることにした。

そして1977年のシーズンが始まったがまだ完治していなかった事もありモンタナはスターターではなく3番目のQBとして登録されていた。ノートルダム大は開幕戦に勝ったものの次のミシシッピ大には20-13で敗れた。もちろん、モンタナはどちらの試合にも出場することはなかった。そして、第3戦目のパデュー大との試合はスターターのラスティ リッシュの調子が悪く、ヘッドコーチのダン ディバインは2番目のフォリステクを起用した。その最初のプレーで相手守備陣に激しくタックルされ脊髄を傷め鎖骨も骨折しそのうえ脳震盪も起こし再びリッシュに交代させた。

フォリステクはこの負傷でフットボールを終えなければならないほどの身体になってしまった。そして、試合終了前11分でパデュー大に24-14とリードされている場でディバイン コーチはリッシュに替えてモンタナをフィールドに送った。

モンタナは前の逆転劇同様パスで154ヤード獲得し、31-24で再び逆転勝利で締めくくった。

1979年1月1日、ノートルダム大はヒューストン大とコットン ボウルで対戦することになった。だが、モンタナは風邪のせいで高熱に悩まされとても試合に出られるような状態ではなかった。試合中はずーっと薬を飲み、もちろんハーフタイムの間も暖をとっていたがモンタナの好きなチキンスープを飲むと突然元気になり第4Qからフィールドに戻りプレーをした。試合は28-34でヒューストン大にリードされていた。

そして、残り僅か4秒モンタナは当たり前のようにTDパスを決め、35-34でヒューストン大を下した。以降この試合は「チキンスープ ボウル」と呼ばれるようになった。この後にこれほど凄いゲームばかりをプレーしてきたのにプロのスカウトの評価は肩が弱いというだけでQBの総合点としては低い評価であった、それが運命としかしいようのないビル ウォルシュの49ersに3巡目でドラフトされたのである。

その評価を覆す時がやってきた。

49ersにとっては初めてのNFLチャンピオン、そして初のスーパーボウル出場が決定する、しかし第4Q残り4分54秒で27-21とカウボーイズに6点のリードを許している。

学生時代から奇跡のような大逆転劇を何度も演じて来たモンタナにとっては6点差を逆転するには4分54秒もあれば十分な時間だと思われるが、NFL屈指の強豪で攻撃陣のみならず、数々の修羅場を乗り越えてきた強者（つわもの）揃いの守備陣を誇るダラス・カウボーイズが相手ではまだプロ3年目のモンタナは若すぎるかも知れない。

モンタナはひるむことなく自陣11ヤードからの攻撃を開始した。

そして、慌てることなくゆっくりと時間を使い残り51秒でダラスゴール前6ヤードまで迫り第3ダウンとなった。

あと2プレーで間違いなく勝負は決まる。

モンタナはセンターからスナップされたボールを受取り、レシーバーを探す、ダラスのディフェンダーも必死の形相でモンタナの背後に迫る。モンタナは背後からの守備陣を避けるために大きく右サイドに動いた、エンドゾーンのレシーバーを探すなかなかフリーのレシーバーが見つからない。レシーバーを探しながら横に動いているとサイドラインが見え、このままだとラインの外に押し出されると思った瞬間エンドゾーンの中でモンタナの動いた方向に動き手をあげているドワイト・クラークが見えた。

モンタナはパスは失敗しても次のプレーがまだ1プレー残っているので相手にボールだけは奪われないよう普段よりも高めにボールをリリースした。（写真・17）ドワイト・クラークは必死に手を伸ばしこのボールを指先で捕らえた、このプレーは「The Catch」と言われ今でも伝説として言い伝えられている。この瞬間スタジアムのスタンドが崩れてくるのではと思われるほどの大歓声につつまれた。（写真・18）49ersは初のNFLチャンピオンに輝くと同時にスーパーボウルでもウォルシュにとっては因縁のあるベンガルズをも倒し初のNFLの王座に就いた。このプレーの後、モンタナとクラークはメディアの引っ張りだことなり、メディアのみならず二人の笑顔は全米の女性をも虜にするほどになった。



(写真・17)ボールをリリースするモンタナ



(写真・18)伝説となっている「The Catch」



第39話

久保田 薫 アメフト マンダラ

其の2 ビル ウォルシュいよいよNFLヘッドコーチに(9)



(写真・19) 京都の割烹でのモ

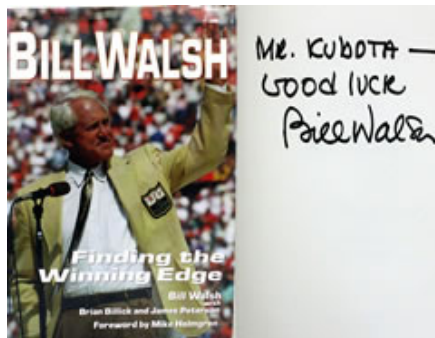
ンタナ (左) と筆者 (右)

モンタナは引退後来日し約束通り京都観光もし京都の和食も楽しんだ、だが一番驚いていたのは京都の祇園の狭い道を巧みに運転するタクシードライバーの運転技術に感心しどうしであった、もちろんカミカゼドライバー？と聞くのも忘れなかった。(写真・19)

2002年8月4日大阪ドームで49ersとレッドスキンの対戦するアメリカンボウルが開催されたが、この試合のテレビ解説をすることになりゲストの大相撲を引退されタレントとして活躍されていた舞の海氏、漫才コンビのアメリカザリガニの人達と取材の為49ersのキャンプ地を訪問することになった。その時に既に現場から引退し顧問として49ersに籍を置いていたウォルシュと久しぶりに再会した、病気がちで病院に通う毎日だと言っていたがそれが最後になった。



(写真・20) 2002年49ersの顧問であったウォルシュ (左) とチームが来日する前の練習場で筆者 (右) と



(写真・21) ビル ウォルシュから筆者に出版したからと送ってくれたサイン入りの自書

ちなみに最後になりましたが、運命のいたずらでウォルシュの元に来なかったスティーヴ フラーは1979年カンサスシティ チーフスにドラフト1巡目で指名された最初のシーズンはルーキーとしてはまずまずの12試合に先発しパスで1,484ヤード獲得し、翌年の1980年には自己ベストの2,250ヤードを獲得し期待されたがそれ以降はパッとせず、83年にはロサンゼルス ラムズにトレードされたが一度もボールを握ることはなく、翌84年にシカゴ ベアーズにトレードされ86年まで在籍したが殆ど起用されることもなく、モンタナのようにスポットライトを浴びることもなくフィールドから去っていった。

本データの著作権は株式会社キュービィクラブに帰属しております。

本サイトの掲載内容（画像、文章等）の一部及び全てについて、無断での複製、転載、転用、改変、配布、商用利用等は固く禁じます。

著作権の無断複製、転載、転用、改変、配布、商用利用等が判明した場合は、法的措置をとる場合がございます。また損害が発生した場合は使用者が一切の責任を負うこととします。

株式会社キュービィクラブ